

神戸女子大学古典芸能研究センター令和六年展示

人・動物・鬼・天狗

い るい い ぎょう
～異類と異形～

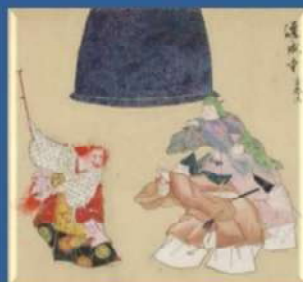
展示図録



「富士の奥に伏姫神童に遇ふ図」(部分)
(志水文庫)



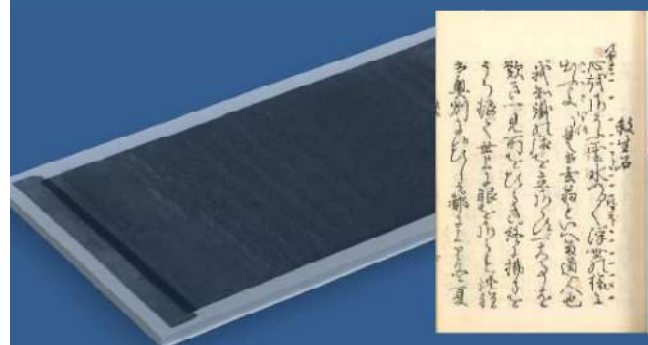
『京雑の記』下巻第二「天狗」より
(志水文庫)



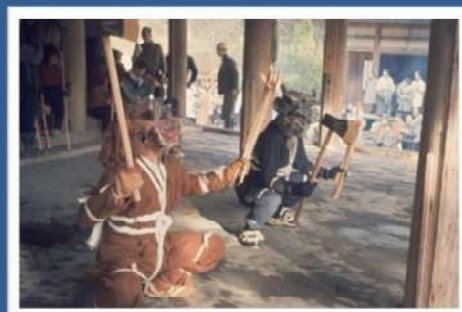
〔福王雪岑 能狂言画巻〕より「道成寺」
(伊藤正義文庫)



「招福三番叟」(会津張り子「申」)



能「殺生石」 明治26年刊観世流謄本(右)
檜書店旧蔵版木(左)



近江寺修正会 鬼の六方
一九六四年撮影(豊多文庫)

期 間：令和6年10月1日(火)～11月29日(金)

時 間：10:00～17:00 土・日・祝日休室

場 所：神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

(神戸市中央区中山手通二丁目23-1 神戸女子大学教育センター2階)

今回の展示は、今秋開講のオープンカレッジ特別講座「異類婚姻と芸能・文学」にあわせて、動物や鬼・天狗といった異類・異形をとりあげます。講座では人間との婚姻譚に焦点が当てられますが、展示では異類異形のものたちをめぐる物語を幅広く紹介します。なお、今回は、本学文学部史学科「博物館実習」の受講生（4回生）が、学外実習の一環としてセンターの資料を使って展示の一部を担当しています。

古典文学や芸能あるいは風俗・年中行事などに見られる異類異形のさまざまな姿と、彼らがあやなす妖しく不思議な世界をお楽しみください。

〔出品リスト〕

	資料名	刊・写	コレクション名
1	三国伝記 巻二	刊	伊藤正義文庫
2	太平記 巻五	刊	志水文庫
3	いっきゅうしよにくものがたりずえ 一休諸国物語図会 巻二	刊	伊藤正義文庫
4	しのだづま	刊	志水文庫
5	あしやどうまんのおうちかがみ 蘆屋道満大内鑑	刊	志水文庫
6	古事記 中巻	刊	志水文庫
7	さんじゅうさんげんどうむなぎのゆらい 卅三間堂棟由来	刊	四世竹本相生太夫旧蔵資料
8	竹取物語	刊	志水文庫
9	ようきょくしゅうようしゅう 謡曲拾葉抄 巻八	刊	伊藤正義文庫
10	新羽ごろも	刊	志水文庫
11	絵入 続狂言記 巻三	刊	伊藤正義文庫
12	えんせきざし 燕石雑志 巻之一	刊	志水文庫
13	本朝神社考 下之六	刊	志水文庫
14	義経千本桜	刊	志水文庫
15	檜書店旧蔵版木:観世流「殺生石」	—	
16	明治期刊観世流謡本「殺生石」	刊	
17	絵本西遊記	刊	志水文庫
18	さんぽそう 招福三番叟(福島県会津張り子「申」)口	—	
19	七太夫仕舞付「源太夫・鉢木・熊野・道成寺・通小町」	刊	伊藤正義文庫
20	きょうがのこむすめどうじょうじ 京鹿子娘道成寺	刊	志水文庫
21	ふくおうせっしん のうきょうげんがかん 〔福王雪岑 能狂言画卷〕	写	伊藤正義文庫
22	因果物語	刊	志水文庫
23	平家物語 巻八	刊	伊藤正義文庫
24	じらいやごうけつものがたり 児雷也豪傑譚	刊	志水文庫
25	南総里見八犬伝	刊	志水文庫
26	「富山の奥に伏姫神童に遇ふ図」	刊	志水文庫
27	さがみにゆうどうせんびきいぬ 相模入道千足犬	刊	志水文庫
28	ししよくまかがみ 諸職画鏡	刊	志水文庫
29	蕪村句呉春画「鬼の寒念仏」	写	志水文庫
30	能画図式	刊	伊藤正義文庫
31	絵入 続狂言記 巻五	刊	伊藤正義文庫
32	酒吞童子	刊	志水文庫
33	うたいきんもうずえ 謡訓蒙図会 巻五「加茂・鞍馬天狗・松風・西行桜・長良」	刊	伊藤正義文庫
34	にまげ 煮雑の記 下巻第二	刊	志水文庫
35	狂言図絵巻	写	
36	きょうげんりくぎ 狂言六義 巻五	写	伊藤正義文庫
37	狂言画	刊	伊藤正義文庫
38	狂言六義 巻二十	写	伊藤正義文庫
39	天狗の内裏	写	志水文庫
40	〔牛若鞍馬天狗図粉本〕	写	志水文庫

※色付き部分の資料は本学史学科「博物館実習」受講生が担当した。

※古典芸能研究センター所蔵資料はコレクション名のみ記載。

「異類」「異形」とは

「異類」とは、種類の異なったもの、普通と違う異様なものの意の語であった。平安末期成立の説話集『今昔物語集』(1120頃)には「其の時、一切の菩薩・天・人・諸の異類の衆会、同音に唱へて云く」(三・29)のように、異なる種を表す語として使用されている。

それがさらに、人間以外の動物(鳥、獣など)や、人間とは異なる他の生存領域に属するものをさす言葉としても使われるようになった。この意味で使われている例が、室町時代中期(15世紀前期)成立の説話集『三国伝記』(展示1)である。

かたや「異形」は、文献には「異類」より早くに登場している。普通とは違った形やそのさま、あやしい姿・様子の意で、そこから、ばけもの・妖怪の類もさすようになった。

『日本霊異記』(810~824)では、「妙見菩薩、変化して異形を示し、盗人を顕す縁」(巻下・第五タイトル)や「異形を播す」(巻下・第三四)のように、単に異なる姿形や不思議な現象そのものを意味している。それが、平安末期成立の『今昔物語集』(1120頃)になると、「人には非で異形の鬼ども^{ある}の極めて怖し気なる者ども^{ある}の行く也けり」(巻六・六)や「異形の天人」(巻二・三五)のように、天人や鬼を形容する語として用いられている。また、関白九条兼実の日記『玉葉』承安2年(1172)7月9日条「或者語云、伊豆国異形者出来云々」も鬼類・蛮夷の類を指し示しており、一方では、異様な姿形をした鬼畜のイメージと結びついていったものと推察される。

こうしたイメージは、本来、普通の人間とは類を異にすることを表わしていた類義語「異類」が、先にもあげた『今昔物語集』で「異類の形なる鬼神ども」(巻一三・一)のように鬼神と結びついて使われるようになることも通じている。「異形」と「異類」とは、まったく同じではないまでも、かなり似通った使い方をされるようになっていくことがうかがえる。

その後「異類」と「異形」の両語は、鎌倉時代頃から「異類異形」あるいは「異形異類」と合したかたちで、種類・形状が異なったもの、世間普通と異なったもの、また、人間でない異様な姿をしたものといった意味で広く用いられるようになる。

藤原定家の日記『明月記』建永2年(承元元年)(1207)8月27日条には「出御之時、異類異形座列、定不叶御意歟」と、居並ぶ下臣たちがふだんとは違う様子であることを言う。また、仏教説話集『沙石集』(1283)巻六・六では、当時の僧の常識から外れた山伏の格好を難じた栄朝上人の言葉を「なまじひに法師とは名づけながら、不可思議の異類異形の法師」(中途半端に法師を名乗りながら、けしからぬ異形異類の格好をした法師)と表現している。

応安年間(1368~75)頃成立の『太平記』(展示2)では、人間ならざるものが田楽を演じている様子を具体的に述べ、それを「異類異形の媚者共が形を人に変じたるにてぞ有ける。」と記す。天保7年(1836)刊(もとになる『一休諸国物語』は寛文年間[1661~1673]刊)『一休諸国物語絵』巻二(展示3)では、「総じて戒律については…四十八きやう戒とて異類異形のいましめなどは…」と(仏教と異なる)他宗教の意や、「異類異形のものが耳の中よりわき、扱も臭く汚きものが出る」と何かわけのわからないものの意で使われている。

1. 三国伝記(巻二)

刊 大本1冊(全十二巻6冊)

明暦2年(1656)村上勘兵衛刊

室町時代の説話集。編者は沙弥玄棟とするが伝未詳。序にいう応永14年(1407)年以後、他書に引用される文安3年(1446)以前の成立とされている。内容は、天竺(インド)・中国・日本の三国の説話を



1. 三国伝記(巻二)

順に各一話ずつ配列して、各巻30話、全360話を収める。一日1話で1年12ヶ月、360日に配したものか。応永14年8月17日の夜、天竺の僧 梵語坊、大明の俗 漢字郎、本朝の通世者 和阿弥が京都の清水寺に参会し、月を待ちながら各自が自国の話を披露するという趣向になっている。

随所に漢文そのままの語順を残した、漢文訓読調の漢字片仮名交じり文で、編者の漢詩文的素養がうかがわせる。寺社縁起、仏法僧の靈驗感應譚など、三国の仏教説話を主体とするが、中国・日本説話のうちには歴史故事や和歌説話など世俗的話題も少なくない。総じて文献に取材したものが多く、和漢の仏書や説話集が有力な典拠となっている。15世紀前半の時点で前代的説話を選択集成した一大説話集として、後代文学への影響も見のがせないものがある。

掲出箇所は、巻二・第二三「玄 奘渡天竺事」。^{げんじょう}玄奘（三蔵法師）が天竺へ向かう道中の話。

伊藤正義文庫

2. 太平記（巻五）

刊 横本 1冊（全四十巻17冊）

南北朝期の軍記物語。応安7年（1374）死去した小島法師の作と伝えるが不明。成立は応安の末年（1375）から永和年間（1375～1378）頃の説が有力。後醍醐天皇の治世から足利義満の將軍就任まで、内乱の混迷した50年間を描く。他書からの引用が多く、中世の百科事典のごとくに称されることもある。



2. 太平記（巻五）

掲出箇所は、巻五「相模入道田楽を^{もてあそぶならびにけんごう}翫^{ばけもの} 併^{かたち} 犬合の事」。相模入道は鎌倉幕府第14代執権の北条高時。田楽や闘犬にふけるなどして人望を失ない、後醍醐天皇の命をうけた新田義貞らの反幕府軍に滅ぼされた人物で、巻五は田楽と闘犬に熱中していた様子を描く。「異類異形」の語が出て来るのは、高時が宴席で酔って舞い狂った時の描写。長時間の宴を不思議に思った侍女が様子を窺うと、まわりで囃していた田楽師と見えた者達が実は「異類異形の媚物共が形を人に変」えた者たちだったという件り。「障子の暇より是を見るに新座本座の田楽共と見えつる者一人も人にてはなかりけり。或は口ばしまがりて、とびのごとく成もあり。或は身につばさ有て、其のかたち山伏のごとく成も有。異類異形の媚物共が形を人に変じたるにてぞ有ける。」（この部分は別系等の本文でも、「田楽どもと見えつるは、一人も人の形はなくて、異類異形の鳶、山伏のからだにてぞありける。」と、表現はやや異なるものの、「異類異形」の語を使う。）侍女の知らせで舅が駆けつけた時にはもぬけの殻、泥酔した高時と鳥獣の足跡だけが残されており、「天狗のあつまりけると」思われた。高時はこうした騒ぎにも動ぜず、田楽を賞翫し続けたという。

志水文庫

3. 一休諸国物語図会（巻二）



刊 大本1冊（全5冊）

天保7年（1836）（京）翰山房近江屋治助ほか刊

平田止水編（辻本基定補正）、菱川清春画。合巻。寛文年間（1661～1673）成立の仮名草子『一休諸国物語』をもとにして挿絵を加えた「図会もの」の一種。後、天保15年には拾遺編（2冊）も刊行された。

3. 一休諸国物語図会（巻二） 図会ものとは、主要古典文学作品に挿絵を入れたもので、安永9年（1780）刊行の『都名所図会』に始まる名所図会シリーズの好評を受けて、同書著者の秋里籬島によって企画された。多くは幕末期に主に上方で刊行され、大本で名所図会類の形式を踏襲している。

本書の内容は、書名通り一休和尚が諸国を巡る中での逸話を集めたもので、先行の『一休咄』（寛文8年刊）、後続の『一休関東咄』（寛文12年刊）など世上に流布していた話を利用しており、序文も『一休咄』を模したものになっている。

伊藤正義文庫

I 「異類婚姻譚」あれこれ

～人間と契る異類異形のものたち～

「異類婚姻譚」とは、動物をはじめとする人間以外の存在と人間とが婚姻する昔話・伝承の総称で、世界各地の民話にも見られる。例えばギリシア神話の「エロスとプシケ」やグリム説話の「蛙の王子」などである。日本に伝わる異類婚姻譚は数多く種類も豊富で、日本昔話の集大成たる関敬吾『日本昔話大成』（巻II資料編）には、動物昔話の話型の一つ「婚姻」の「異類聾」と「異類女房」の分類のもと、類型別に収録されている。主なものをあげよう。

異類聾：

「蛇聾入・^{おだまき}芋環型」「蛇聾入・水乞型」「^{かっぱ}河童聾入」「鬼聾入」「猿聾入」「犬聾入」
「^{かいこがみ}蚕 神と馬」「^{こだま}木魂聾入」

異類女房：

「蛇女房」「蛙女房」「^{はまぐり}蛤 女房」「魚女房」「竜宮女房」「鶴女房」「狐女房」「猫女房」
「天人女房」

婚姻相手の異類が男性の場合（上記「異類聾」、A群）と女性の場合（上記「異類女房」、B群）は、それぞれ特徴的な型がある。B群では、異類が嫁入る動機が多くは男に助けられたお礼であり、夫の家を富ませるが、ほとんどは男が禁忌を犯し破綻に至る。破綻の主因は、産屋の授乳（蛇女房、記紀神話の^{とよたまひめ}豊玉姫説話に同じ）や機織り（^{はた}鶴女房）や沐浴（^{もくよく}魚女房）などの見てはならない異類の状態を、男が好奇心をもってのぞくことが多い。婚姻時の約束で女房は本来の姿に戻って去ることになるが、女性が人目のない所で真の姿に戻ること——聖なる力が満たされたときの、場所・行為——に対する^{いけい}畏敬の念が底流にあったとみることもできよう。

一方、A群のパターンもほぼ共通する。例えば、三人娘の父親が田に水を入れてくれれば娘の一人を嫁にやると異類と約束し、水を引いてもらう。二人の姉妹は嫁入りを拒否して末娘が異類に嫁す。妻は、里帰りの日に異類の夫に重い^{うす}臼を背負わせ、臼ごと川に沈める（あるいは針を投げて殺す）というような展開である。ただ「蛇聾入」については、水乞型はこの筋に属するが、^{おだまき}芋環型はタイプの異なる三輪山神婚伝説型で、こちらは、夜ごとに通ってくる夫の衣に糸を通してその後をつけ、その正体を知ることになる。

人間と契る異類たちは、他界から来臨する神もしくは精霊的性格を備えており、その^{たね}胤を人間界にとどめようとする解釈される。しかし、日本の昔話では異類婚夫婦はほとんどの場合、破綻に至る。つまり、異類の胤を否定し、超力を持った人間の伝承となる。これはいわば昔話伝承の屈折の結果であり、時代相がもはや動物や妖怪の胤を認めなくなった時点で話の筋が固定したともされている。

ところで、前掲の分類では異類に動物以外の者も含まれており、相手によって以下のように分けることができる。

- ①相手が動物の場合…蛇、猿、鶴、狐など
- ②相手が異界（異郷）の存在の場合…木魂、天人など
- ③相手が異形の存在の場合…河童、鬼など

以下、本展示のI部では、上記の分類に沿って事例と関連資料を紹介しよう。
（※川森博司『ツレが「ひと」ではなかった』（淡交社、2023年刊）参照）

I a 動物との婚姻

日本の昔話の中には、人間の男性と動物の女が結婚する話が非常に多い。最も有名なものが、いわゆる「鶴の恩返し」として日本各地で伝えられている鶴女房の話だろう。命を助けられた鶴が恩返しのため人間の女性の姿となり嫁に来て、自分の羽根で布を織るが、正体を見破られて去る。動物の報恩の要素と結びついた異類婚姻譚で、鶴の代わりにコウノトリとして伝える地方もある。

狐が女性に化ける「狐女房」型もあり、こちらは夫婦の間に男の子が生まれるが、後に正体を夫に知られた妻は、自分の所在を詠み込んだ歌を残して立ち去る。この男子は成長し立派な人物となる。類話は古く『日本霊異記』にもみえ、美濃国（岐阜県）の狐きつねのあた直という家筋の由来譚になっている。異類女房譚のなかでも「蛇女房」や「天人女房」と同じく妻は離別するが、子孫は長く残る点に特色がある。類話は数多く伝わるが、最も有名なのは陰陽道の大家 安倍晴明おんみょうどうに係わる伝説だろう。後に説経節や浄瑠璃しのだづまの「信太妻」としても有名になるが、この中では晴明は、安倍保名やすなが和泉国（現 大阪府）の信太森の白狐の化身である女と契って生まれた子とされている。この話は旅芸人の語り物や盆踊り唄くどきの口説にもなっており、昔話もそうした語り物が伝存したものらしい。

一方、人間の女性が動物の男と結婚する話で多く語り伝えられてきたのは猿轡の話で、最後に轡は殺されてしまう。（西日本と東日本で筋の展開にやや違いが見られるが結末は変わらない。）婚姻が成就しないのは鶴女房など異類女房譚の場合と同じだが、単なる別れではなく、異類の轡が人間に殺害されてしまう点は大きく違う。

轡が蛇の場合は、前掲の通り、日本の伝承においては「水乞型」みずごいと「芋環型」おだまきの二類型に分かれている。

水乞型では、干魃に悩む父親が田に水を入れてくれた蛇に三人娘の一人を嫁にやる約束をする。末娘が針千本と瓢箪を持って蛇について行き、池に瓢箪と針を投げ入れて、蛇にそれを沈めれば嫁になるという。蛇は沈めようとするが体に針が刺さり死ぬ。（ちなみにこの話は、古くから水界を支配する蛇信仰を色濃く残している。）

一方、芋環型は、娘のもとに毎夜男が通ってくる。不審に思った母親が男の着物の裾に糸を通した針を刺させる。翌朝、糸をたどっていくと、洞穴の中で針の毒にあたった蛇が苦しんでいる。そこで母は娘が蛇の子を宿したこと、その墮ろし方などを聞き知る。娘は3月3日の桃酒（または5月5日の菖蒲湯）によって蛇の子種を墮ろす（話の結末で節供の由来を説く例も多い）。子どもが生まれる場合もある。この系統の話は『古事記』（展示6）をはじめ「風土記」や『平家物語』（展示23）などにみえ、記録のうえからも変遷をたどることができる。生まれた子は、越後国（現新潟県）の五十嵐小文治こぶんじや豊後国（現大分県）の緒方三郎のように、一族の始祖として活躍する英雄誕生に結びつけられることもあって、発生的にはこのほうが古い形を残すと考えられる。

猿轡や蛇轡の話ではこのように、おおむね彼らが出した交換条件を人間が策略で断ち切ってしまう。言い換えれば、人間側は最初から異類を排除しようとしているのであり、人間の視点で「災難を克服できた」というハッピーエンドとして語られるのが特徴である。

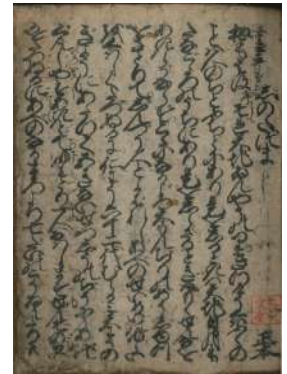
4. しのだづま

刊 半紙本1冊

五段、浄瑠璃。天下一相模掾藤原吉勝（山本角太夫）正本。延宝6年（1678）版は関西大学蔵本のみ現存。同年版と同じ十行・33丁本は、本資料を含め数種が確認されている。ただし、本作は山本角太夫の創作ではなく、伊藤出羽掾の『しのだづまつりぎつね並ニあべノ清明出生』（延宝2年刊）を弟子の角太夫が踏襲したもの。

内容は信太の森の葛の葉伝説と安倍晴明伝説（『^{ほきしょう}簗抄』『安倍晴明物語』等に見える）を結び合わせた作。三段目は、狐と美女が入れ替わる場面で子別れの悲しみの中に奇術の如き怪しげな美しさを見せて、四段目・五段目のからくりや系操りとともに、演出面からも注目される。相当に流行したらしく、紀海音「^{きのかいおん}信田^{しのだのもりおんなうらかた}森女占」や竹田出雲の「^{あしやどうまんおおうちかがみ}蘆屋道満大内鑑」（*展示5）をはじめ、読本などにも影響を与えた。

志水文庫



4. しのだづま

5. 蘆屋道満大内鑑

刊 半紙本1冊
(京) 鶴屋喜右衛門刊



5. 蘆屋道満大内鑑

五段、浄瑠璃。竹田出雲作（山本版七行本）。享保19年（1734）10月大阪竹本座初演。十行本、70丁。

宮中内の勢力争いを全編の軸とし、これに信太の森の白狐が人間と契り陰陽道の名人安倍晴明を生んだという『^{ほきしょう}簗抄』などに見られる伝説や、お家騒動の筋をからませた時代物。先行作品では悪役であった道満を、主人への忠と自らの良心の間で苦悩する陰影に富む人物としたところに本作の新しさがあるとされる。また、葛の葉子別れの場は、超人的な素材が現実的な人間世界の次元のものとなり、親子・夫婦の愛が哀切な筆致で描かれていて全編の眼目となっている。なお、元文2年（1737）3月江戸中村座で歌舞伎化され、以来、歌舞伎の信田妻ものはすべて本作によって上演されている。

志水文庫

6. 古事記（中巻）

刊 大本1冊（全三巻3冊）
(京) 永田調兵衛刊

奈良時代の歴史書。三巻。天武天皇の勅命で^{ひえだのあれ}稗田阿礼が誦^{しょうしゅう}習した帝紀や先代旧辞を、元明天皇の命を受けた太安万侶が撰録したもの。和銅5年（712）成立。日本最古の歴史書で、上巻は神代、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの記事を収め、神話・伝説・歌謡などを含む。

本資料は、下巻末に「寛永廿一甲申年孟夏吉（辰）／洛陽書林 前川茂右衛門開板」とあり寛永21年版に同じ。寛永21年版は二大別される伝本の「卜部本系統」の第八類で、先述の三輪山伝説を中途半端なかたちで欠いている。

（ちなみにこれは「卜部本系統」本全体ではなく第八類の

特徴。祖本である卜部兼永自筆本には含まれている。p.11・19参照。）

志水文庫



6. 古事記（中巻）

I b 異界の者との婚姻

異界に存在する者と人間との婚姻（一時的にでも）譚がある。相手が人間の男女どちらかに係わらず、その異類たちがどこからやってくるのか、あるいは人間がどこに出かけて行って異類と出逢うのかに注目すると、相手の世界は①水界、②地上にある異界（異郷）、③天界、と分けられる。

日本の昔話で水中の異界としてしばしば竜宮が登場する。人間の男が竜宮の女性と結婚し、地上で幸せに暮らすという結末が多い。竜宮といえば「浦島太郎」の話が有名だろう。現在知られている「浦島太郎」（国定教科書掲載分や文部省唱歌版）には婚姻のモチーフがないが、この話も古くは異類婚姻譚として伝承されていた。老人となった太郎は鶴になり、竜宮の女が亀として現れ、夫婦で浦島明神として祀られるのである。

水中に対して、地上の異界の代表は山中の樹木だろう。樹木に宿る霊が人間と契る「木魂女房」^{こだま}「木魂髻」の話では、一定期間の結婚生活が成就されるが、最後は哀しい別れに至る。木魂女房の話は、浄瑠璃^{さんじゅうさんげんどうむなぎのゆらい}「卅三間堂棟由来」（展示7）の素材となった。

さらに相手が天上世界の存在の場合。これは世界各国に見られるが、日本で広く伝承されてきたのはいわゆる「天の羽衣」の天人女房譚で、男が天女の羽衣を奪って隠し、天女は妻となる。夫婦に子どもが生まれる場合は話がさらに続く。やがて子どもが羽衣を発見し、妻は子どもをつれて天に戻る。その後教えられた通り男が天に来て、舅の出す難題を妻の協力で解決するが、最後に大水が出て二人は年に一度七月七日にしか会えなくなる。

この話のポイントは、天人女房はふつうの人間の姿をしており、羽衣の着脱が地上世界と天界を分ける重要なモチーフとなっている点である。羽衣着脱の要素は欠くものの、天人女房と似た筋をもつかぐや姫伝説は、日本最古の物語『竹取物語』（展示8）として成立した。ただしここでは、難題や天上世界の位置づけが異なっており、結末は、かぐや姫と帝は永遠の別れを迎えることになる。

7. 卅三間堂棟由来

半紙本1冊

明治期（大阪）加島屋清助刊



7. 卅三間堂棟由来

五段、浄瑠璃、時代物。若竹笛躬・中邑阿契合作。文政8年（1825）7月、大坂御霊境内初演。本資料は近代になって刊行された五行稽古本。朱譜書入、書込有。本作は、宝暦10年（1760）12月大坂豊竹座初演の『祇園女御九重錦』全五段のうち、三段目「平太郎住家」^{きやり}「木遣音頭」を独立させて改題したもの。通称「柳」。

横曾根平太郎と契り、一子緑丸^{みどりまる}をもうけた妻お柳^{りゅう}は、実は柳の古木の精であった。その柳が、白河法皇の病氣治癒のため切り倒され三十三間堂の棟木にされることになったので、お柳は夫と子に別れを告げて去る。切り倒された柳の大木は途中、動かなくなるが、平太郎父子の木遣音頭によって引かれてゆく。詞章はほとんど原曲のままだが、この段は現代では人形浄瑠璃・歌舞伎ともにこの名題で上演される。

四世竹本相生太夫旧蔵資料

8. 竹取物語

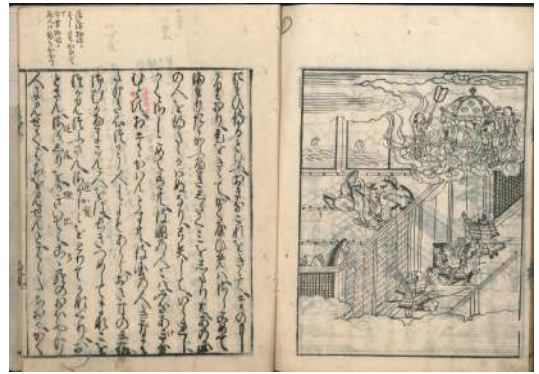
刊 大本1冊(二巻1冊)
茨城多郎左衛門刊

物語。一卷。作者未詳。平安初期の成立。『源氏物語』
絵合巻に「物語の出で来はじめの祖なる竹取物語」とあ
るように、『源氏物語』時代にはすでに物語の嚆矢とされ
ていた。

竹取翁が竹の中から得た「小さ子」、なよ竹のかぐや姫
は、五人の貴公子の求婚されるが、難題を出して失敗さ
せる。そして帝の求婚にも応じず、八月十五夜に月の世
界に去る。

天人女房譚(羽衣説話)を軸に、「小さ子譚」の話型を取り入れ、異常出生、不思議な成長、財宝拾得、求婚難題説話など各種説話を配して物語化したもの。書名は竹取翁物語、竹取の翁、かぐや姫とも。掲出箇所は、かぐや姫が月に帰る場面の挿絵。

志水文庫



8. 竹取物語

9. 謡曲拾葉抄(巻八)

半紙本20冊、第8冊

明和9年(安永元年)

銭屋七良兵衛・鍵屋源兵衛・吉文字屋市兵衛刊



9. 謡曲拾葉抄(巻八)「羽衣」

最初の注釈書『謡抄』にかわって最も流布した、全101
番の謡曲注釈書。巻一の冒頭4丁が詳細な凡例で、その第
一条によると、貞門派の俳人の犬井貞恕(1620~1702)の
遺した草稿に、門人空華庵忍鎧(1670~1752)が四十年間
にわたって加筆増補し、寛保元年(1741)にはすでに成立
していたことがわかる。さらに、所収曲は観世流の謡本を
底本とし、内百番でも他曲と重複する語の多い曲は除き、

外百番から代わりの曲を採用した旨を述べる。注の内容は非常に詳細で、当時の注釈の一般的傾向と同様、広く関連資料を探索して注を加えている。掲出箇所は、「羽衣」部分。

伊藤正義文庫

10. 新羽ごろも

刊 半紙本 共表紙 1冊
(江戸) 富士屋小十郎刊

内題「寿相生羽衣」、長唄の正本。宝暦8年(1758)初
演。内容は能の「羽衣」が素材。そのあらすじは、三保の松
原に降り立った天女が、松の木にかけておいた羽衣を漁夫の
白竜に奪われてしまう。天女は、哀願して舞を見せるとい
う約束で返してもらい、天女の舞を見せて空に飛び去るとい
うもの。(この舞が宮中の舞楽の東遊の始まりという)。

長唄ではほかに「天人羽衣曲」があり、常磐津にも「天人羽衣」など、同種のものは多い。近代になつては、明治31年(1898)に、長唄・常磐津掛合の所作事である「羽衣」が五代目菊五郎によって初演された。(明治44年(1911)の帝劇開場式の興行では六代目尾上梅幸が演じた。)この「羽衣」は、尾上菊五郎家の「新古演劇十種」の一つになっている。

志水文庫



10. 新羽ごろも

I c 異形の者との婚姻

日本の昔話「雪女」「幽霊女房」「河童髻」「鬼髻」、西洋の伝承「人魚姫」「美女と野獣」などでは、婚姻相手は自然物の生き物ではなく、さまざまな形態をした異形の存在である。その姿かたちは想像力の賜物だが、その表象が伝承されるためにはその外観に何らかのリアリティが必要であった。つまり、異形の表象のありようは、その話を伝承している社会の文化が反映されていると考えられる。人間と結婚した異形の者たちの諸相をみよう。

「雪女」は、哀しい別れの結末は動物女房と共通するが、別世界からきた女性が人間界で結婚生活を一定期間成就し、子どもが複数生まれた後に人間界を去る点は、天人女房の話の枠組みに近い。

日本の各地に見られる「食わず女房」の伝承は、物を食べないと見せた女が、口以外から大量に食物を採っていたことが露見し、破局に至る。異形のもの、排除・撃退の対象であった。皮を被って老女と化す「姥皮」説話や鉢がとれなくなった「鉢かづき姫」など、一時的に尋常なさらざる外見となるヒロインたちは、半分は人間・半分は異類と見るなら人魚にも通じる要素がある。彼女らは尋常な外見に戻れてこそ、ハッピーエンドを迎えるのである。

異形の女房に対し、異形の夫系統の話もある。異様に小さな身体で生まれた「小さ子」譚は、恋をした男が最後は普通の大きさに戻って幸せな結婚をするというシンプルな筋である。これは後に、高貴な生まれであったことが後に判明する御伽草子の「一寸法師」へと展開する。「一寸法師」は一種の貴種流離譚であり、ここでは異形が一つの試練として位置づけられている。

一時的ではなく本来的に異形の存在が主役の場合はどうだろう。「鬼髻」は、猿髻や蛇髻と同様に最後は死に至る。とはいえ、動物髻が人間の策略によって殺害されるのに対し、鬼髻の死は自然災害による不慮の事故である。動物は人間がコントロールできても、鬼は人間の制御を超えた存在という位置づけなのであろうか。

II. 絵入 続狂言記（巻三）

刊 横小本1冊（全五巻5冊）

嘉永元年（1848）（大坂）鷲頭辰三郎ほか刊



II. 絵入 続狂言記（巻三） 「鬼養子」挿絵

『狂言記』は、江戸時代に版本として市販された狂言台本。最初の『狂言記』（正篇）は万治3年（1660）刊で、続いて『狂言記外五十番』『続狂言記』『狂言記拾遺』と各50曲、計200番が公刊された。これらはいずれも「絵入」と頭書し、舞台図挿絵を多数掲載するのが特色。詞章は既存の狂言三流（大蔵・和泉・鷲）のものとは異なり、上方で活動していた町方群小狂言流派の台本によったものと推測されている。『続狂言記』の初版は元禄13年（1700）で、本書は天保二年補刻と同版。

巻三は「岡太夫髻・竹子争・朝比奈・暇袋・^{たけのこあらそい}鬼養子・つんば座頭・金岡・昆布布施・六人僧・寝声」所収。掲出箇所は「鬼養子」。赤子を抱いた女を鬼が襲って妻になれと言うので妻がやむなく承知すると、鬼は囃子物で子をあやすが、食おうとして女に取り返されるという内容。

伊藤正義文庫

Ⅱ 描かれた異類異形のものたち

～狐・猿・蛇・犬・鬼・天狗～

前半の第Ⅰ部では、オープンカレッジ秋期講座「異類婚姻と芸能・文学」に関連して、異類婚姻に係わる異類異形のものたちのストーリーをとりあげて紹介した。後半の第Ⅱ部では、婚姻譚に限定しないで、伝承や文学作品、芸能の世界において異類異形のものたちがどのように描かれてきたのか幅広く見ていこう。

具体的には、動物の中から狐・猿・蛇・犬を、いわゆる異類異形といわれるものの中からは鬼と天狗をとりあげて、主なイメージを説明しながら関連資料を紹介する。

なお、第Ⅱ部については、本学文学部史学科「博物館実習」の受講生（4回生）が、学外実習の一環として、各コーナー総説パネル作成および展示14～20、25・26、32～34を担当した（詳細別記）。

妖獣としての狐

第Ⅰ部「異類婚姻譚」の冒頭で、「狐女房」型の子別れ伝承に触れた。狐に関する伝承は多種多様で、中国古代から吉凶さまざまなものが伝えられている。中国の陰陽五行思想の関連で狐を土徳の動物とする、あるいは穀物神として崇め、また稻荷明神の使者とする伝承などは瑞獣のイメージだろう。

また一方で狐は妖術を使う陰気の獣であり、特に女性に変身して人間に何らかの害を及ぼす存在として描かれることも多い。唐代の小説『任氏伝』(『太平広記』巻452)は狐が化けた美女の任氏が鄭六を愛する物語で、彼女は犬に正体を見破られて去る。同様の話は『日本霊異記』(上巻・第二「狐を妻として子を生ましむる縁」)にもあり、これらはともに男性に害はなさない。だが、後代の『今昔物語集』(※狐の変身譚は巻27に多い)や『古今著聞集』は、このほかに人間を騙す悪しき存在である狐の話各種を伝える。平安時代後期の学者 大江匡房は、巷間に流布した狐の怪異譚を集めて、『狐媚紀』(康和3年[1101])を著している。

「金毛九尾」もこうした伝承の一つで、金色の毛をして九つの尾を持つとされた、想像上の狐である。三国(天竺・中国・日本)をわたり美女に化けて、天竺(インド)では花陽夫人、中国では殷の妲己、日本では玉藻前として生まれ、権力者に寵愛され、悪行の限りを尽くした。玉藻前は鳥羽法皇(在位1107～23、譲位後、崇徳・近衛・後白河三代28年間院政を行なった)の寵姫となるが、陰陽師の安倍泰成に正体を見破られて、下野国(現 栃木県)那須野に逃げる。そこで射殺された玉藻前の霊は石と化して、近寄る人や鳥獣を殺し、「殺生石」と呼ばれた。のちに玄翁和尚の法力で、妖狐の精魂は散滅させられたという。

この金毛九尾の物語は、中世に能の題材となり(「殺生石」展示15・16)、近世には多くの読み物(高井蘭山『絵本三国妖婦伝』(1804)や式亭三馬『玉藻前三国伝記』(1809)など)として書かれ、人形浄瑠璃の素材にもなった。

12. 燕石雜志（巻之一）



12. 燕石雜志（巻之一）

刊 大本1冊（全五巻6冊）
文化8年（1811） 河内屋太助ほか刊

蓑笠軒滝沢瑣吉（曲亭馬琴）著。文化6年（1809）成立。小説執筆に際して、常に古諺・歴史・地誌などの克明な考証を怠らなかった馬琴が、日の神、鬼神余論以下全59条にわたって考証した随筆集。とりわけ、日本の古伝承や古風俗に対して精細かつ独自な見解が示されており、「桃太郎」「舌切雀」「猿蟹合戦」などの考証は珍しく貴重である。巻尾に引用書として和漢238部の書名をあげている。

掲出個所は、「九 恠刀禰 付九尾」の条。冒頭で『簠簠抄』の安倍晴明の母が信太の森の狐の化身であったという説にふれた部分。以後、狐の語源、狐が野干と言われる理由、玉藻前説話、九尾についてなど、古今の諸書を引きつつ、詳細に考証している。 志水文庫

13. 本朝神社考（下之六）

刊 大本1冊（全三巻6冊）



13. 本朝神社考（下之六）

全三巻、林道春（羅山）著。寛永15年（1638）以降、正保2年（1645）以前の成立か。神道の本姿を明らかにする目的で、全国の主要な神社の祭神・由来・信仰・靈験等を考証したもの。遺編を訪ね、古老を訪い、縁起を伺い、『旧事紀』『古事記』『日本書紀』『延喜式』などをはじめ諸古典に検した、と序に云う。著者は、本書の立場について、社寺混交を歎き、仏教を痛撃、史学的に神道を「上古淳直の姿」（序）に復せんというが、自らは神儒一致の思想に立っている。本書の刊行以前は、全国を網羅的に紹介した本格的な神社・信仰の研究はほとんどなく、その点で本書は画期的で、後世への道を開いた功績も大きい。掲出個所は6冊目（人物や諸事の考証が主）の15番目「玉藻前」の項。次に「安倍晴明」の項が続く。 志水文庫

展示6「古事記」（p. 6）

参考資料

※【展示6】（寛永二十一年刊本）の本文は、この兼永本をもとにする系統に属するが、赤枠部分を欠くため、三輪山伝説がない。



『卜部兼永筆本 古事記』（勉誠社、一九七一年）

狐

狐は日本の文化・信仰に対して親密な関係である。人を化かす^{いたすら}悪戯好きの動物でもあり、稲荷神社に祀られる農業の神様・宇迦之御魂神の「神使」^{うかのみたまかみ}「眷属」^{かみのつかい}などと呼ばれる、神様の使いの霊獣でもある。



伏見稲荷大社（撮影 大場琉可）

狐が稲荷神社に祭られている理由

「山の神・田の神」の信仰で、春になると山の神が山から里へ降り、田の神となって稲の生育を守護し、収穫が終えた秋に山に帰って、山の神となる信仰がある。キツネも農業が始まる春から収穫の終わる秋まで人里に姿を見せ、田の神が山へ帰る頃にキツネも山へ帰る。「山の神・田の神」が人里に来るとされる時期に姿を見せるキツネの行動から、キツネが稲荷神社の神使とされるようになったと考えられる。

狐伝説

キツネは化けるもの、あるいは人に憑くものであるという妖狐の話や、吉兆の象徴と言われる^{びゃっこ}白狐・^{げんこ}玄狐の話、陰気の獣として女に化けて男を誑かす話がある。このような伝承は中国の影響が大きい。八世紀中頃以降、キツネの神性は衰え逆に妖狐としての役割を強めた。変身を遂げる狐は『日本霊異記』^{にほんりょういぎ}弘仁13年（822）にはじめて書かれた。「狐」という語がはじめて登場したのもこの文献である。『日本霊異記』以降も無数の狐変身譚がみられる。『今昔物語集』（1120～40）成立前後には、妖獣としての性質に^{ほうおん}報恩・^{いたすら}悪戯・仇討ちなどの要素が加えられ、狐伝説は多彩さを増すようになり、文学や伝統芸能の作品にも登場するようになった。



安倍晴明像（安倍晴明神社）
（撮影 朝井美玲）

狐が登場する作品



香蝶楼豊国,『安倍泰成調伏妖怪図』, 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1307759>

能「殺生石」

玄翁げんのおうという僧侶が下野国げんのおのの那須野なすのを通りかかる。ある石の上を飛んでいた鳥が落ちていく様子を見て不審に思う玄翁の前に女性が現れた。この石は玉藻の前の執念が化した「殺生石」という石である、と女性は語り始める。昔、玉藻の前という鳥羽上皇に仕える女官がおり、上皇から寵愛を受けていた。しかし、陰陽師の安倍泰成に狐であると正体を見破られて那須野に追われ討たれた。女性はこの話をした後、自分が玉藻の前の亡霊であると言い姿を消す。

玄翁は石を成仏させてやろうと念仏を唱えた。すると石は二つに割れ、狐が姿を現す。狐は天竺から唐土そして日本へやってきた過去、そして那須野で追手の矢に射られて絶命した様子を語る。狐は玄翁の弔いによって成仏を遂げたことに感謝し、人や動物に害をなさないことを誓って姿を消した。



『開場40周年記念 国立劇場歌舞伎公演記録集5 通し狂言 義経千本桜 下巻(二部)』、ぴあ株式会社、2005

義経千本桜

狐は人形浄瑠璃や歌舞伎(義太夫狂言)の三大名作の一つである「義経千本桜」にも登場する。

「義経千本桜」は敗れた平家の三武将である平知盛、維盛、教経の後日談を大筋とした作品である。知盛の悲惨な最後を描いた二段、鮎屋すしやの場面を中心にした三段、佐藤忠信に化けた狐の伝記的活躍を描いた四・五段などの場面を中心に上演される。

「殺生石」で登場する狐は、人に害を与え世を乱す存在であったが、「義経千本桜」では、狐は義経の部下である佐藤忠信に化け、静御前を守ってくれるヒーローとして登場している。

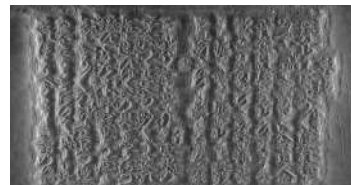
- 狐 14. 『義経千本桜』
刊 半紙本1冊
京 美濃屋平兵衛刊



- 狐 15. 檜書店旧蔵版木 観世流「殺生石」 1丁（裏面2丁）



檜書店旧蔵版木 観世流「殺生石」初丁



初丁の文字部分（鏡像）



16. 「殺生石」初丁表（右）・裏（左）

- 狐 16. 『明治二十六年刊観世流謡本（内組）』二十
「邯鄲・殺生石・野宮・百萬・自然居士」
半紙本1冊（内組全20冊）
檜常之助 明治二十六年二月刊

- 猿 17. 『絵本西遊記』（初編巻之七）

刊 半紙1冊
全7巻7冊（3巻3冊欠）



17. 絵本西遊記（初編巻之七）

全4編40冊。初編10冊。このうち初編7巻7冊が当センター所蔵。口木山人著、吉田武然校閲、大原東野画。文化3年（1806）成立。西遊記が中国から日本へと渡来したのは、室町末頃とされる。日本語訳の西遊記は、口木山人こと西田維則が『通俗西遊記』を宝暦8年（1758）に出したのがはじまりである。『通俗西遊記』は、全編カタカナで挿絵も使用されておらず、カタカナで書かれた文を普段読まない人にとっては、親しみにくいものだった。より親しみやすくするためにこれを絵本化し、文章をひ

らがなにしたものが『絵本西遊記』である。

展示しているのは孫悟空が女性に変身し、猪八戒をだまして懲らしめている場面である。 志水文庫

- 狐 18. 招福三番叟（福島県会津張り子 申）

京 舞井上流五世家元・井上八千代氏の人間国宝認定を祝う会（平成27年12月15日）での引出物。

会津張り子人形は、16世紀の織豊期まで遡る。蒲生氏郷が、豊臣秀吉の命で会津黒川城に入封した際、会津の産業を発展させるため京都の人形師を招き下級武士たちに張り子の技術を習得させたことから始まる。

猿（申）は山神の使いと信じられ、信仰の対象として馴染みのある縁起の良い干支である。三番叟の舞は大変めでたい舞とされ、猿の三番叟は人形のモチーフとしても人気がある。

ちなみに井上八千代氏は申年（1956）の生まれである。



18. 招福三番叟

猿

神聖視と卑賤視

猿はヒトと近似性があることからか、古来よりヒトと神々との仲介役を担うなど、神聖視されていた。しかし中世から近世にかけて次第にその地位が失われ、ヒトと似て非なる存在としてスケープ・ゴートや道化の役を背負わされるようになる。

さるたひこ 猿田毘古

「猿田毘古」は、天孫降臨の際にヒコホノニギノミコトの道案内をした神で、日吉神社の祭神として祀られており、「尻が赤い」と形容される姿と「猿」の名がついていることから猿神とみられる。

「猿」は猿真似という言葉があるように道化の印象を有しているが、「さる」の音が「去る」を連想させることから厄除けの神として信仰されている一面もある。これらの側面が道教の「庚申信仰」や「厩の神」とする俗信とも一体となり、「猿楽」や「猿回し」といった芸能と結びついていった。



平田篤胤賛猿田彦御神像

猿田彦神社社務所『猿田彦神社誌』
(猿田彦神社御造営奉賛会、1998)

猿にまつわる伝承

中世以降の伝承には、「猿長者」・「猿聲」・「猿神退治」・「猿蟹合戦」などがある。「猿長者」という昔話では、貧相な年寄りに扮した神をすげなく追い返した爺が、親切にもてなした爺の得た幸福を羨み同じ幸福を求めた結果、猿へ変身させられてしまう。「猿聲」は人間と動物との婚姻をテーマにした異類婚姻譚で、娘と猿が織りなす昔話である。猿に要求されて嫁に行くことになった娘が、知恵を凝らして猿を殺害し、婚姻から逃れるといった筋書きを持つ。もし、猿を神聖視していれば、結末は最終的に婚姻が成立する形になるはずだ。

これらの点から、中世以降には既に猿の地位が落ちていたとわかる。その他の伝承・物語でも猿は退治される側であることが多く、古来のような猿を神とし、神聖視する傾向は次第に失われていった。



新猿蟹物語

巖谷小波『日本新五大噺』（三立社、1911）
国会図書館デジタルコレクション



猿
聲

展示資料の概要

西遊記

16世紀の明代に成立した全100回から成る長編小説で、『水滸伝』・『三国志演義』・『金瓶梅』と並んで四大奇書といわれている。唐の三蔵法師と孫悟空・猪八戒・沙悟淨らの冒険を奇想天外に描いた物語である。主人公の孫悟空は、石から生まれた猿で神通力を持ち、悪行を釈迦如来にとがめられ五行山に閉じ込められたが、三蔵法師に救われ天竺への旅に加わるようになった。

第1回から第8回は孫悟空の生い立ち、第9回は三蔵法師の生い立ち、第10回から第12回では唐の太宗の地獄めぐり、第13回から第100回は天竺に取経をする旅の顛末で構成され、旅の道中で起こる妖魔たちとの戦闘に重点が置かれた冒険活劇としての面が強調された物語である。

この物語は、唐の実在した僧である玄奘三蔵が天竺へ行き、帰国後にまとめられた見聞記『大唐西域記』や弟子の慧立が書き記した『大慈恩寺三蔵法師伝』を基礎としている。これらの故事が伝承される間に民衆の好みに応じた創作・取捨・改作が次第に加えられ、中国民話の宝庫と言える豊かな作品に成長した。



口木山人『絵本西遊記初編巻之一』（1806）

登場人物紹介の孫悟空のページ



舌出し三番叟

福地義彦『歌舞伎入門 たのしさ倍増「鑑賞の手引き」』（婦人画報社、1995）

さんばそう 三番叟

能の「翁」の役の一つで、狂言方が勤める舞。能の前身にあたる猿楽が本芸として伝えていた「翁」は「式三番」と呼ばれ、父尉・翁面・三番猿楽（のちに「三番叟」）の三つで老翁が順次に奏する演目であった。後に父尉は省かれるようになるが、神聖な儀典曲として正月や記念能などハレの日上演された。

この能における「式三番」は歌舞伎にも展開され、その精神は受け継がれているものの、狂言方が受け持つ三番叟が主役となり、軽快な動きを舞踊化した点に特色がある。歌舞伎の三番叟には様々な演目があり、能の「翁」に最も近いものは安政3年(1856)に初演された「寿式三番叟」である。

※「猿」セクション担当：神戸女子大学文学部史学科4回生大橋悠衣子・岡あかり・岡野花耶

蛇にまつわるおはなし

神話・説話における蛇のイメージ

神話における蛇

神話に登場する蛇の中で特に有名なものは、奈良時代の初め、和銅5年(712)につくられた『古事記』の八俣大蛇であろう。出雲の国を訪れた須佐之男命すさのおのみことが、美しい娘を食べに来た八俣大蛇を退治する、という話である。

蛇は、養老4年(720)につくられた『日本書紀』にも登場する。第10代天皇崇神すじんの時代、大物主神おおものぬしのかみの妻になった倭迹迹日百襲姫命やまととどひももそひめのみことの話である。夜にしか自分のもとにやっこない夫に顔が見たいとせがみ、姿を見ても驚かないことを条件に承諾してもらうが、翌朝櫛笥くしげ(化粧箱のこと)を見た姫は、小蛇の姿で現れた夫の姿に驚いてしまい、大物主は恥じて山に帰ってしまう。

『古事記』に登場する八俣大蛇のように、蛇は古くから悪者としてイメージされることが多い一方で、『日本書紀』の話のような、人間との異類婚も語られているのである。

説話における蛇

12世紀前半の成立と推定される『今昔物語集』こんじゃくものがたりしゅうにおいては、蛇が執着深い動物として捉えられていたことがわかる。巻第13の43話は、紅梅の木を大切にしていた娘が死んだあと、その木のもとに蛇が現れ、両親はそれを娘の生まれ変わりと考え、法華経で成仏させたという話である。娘は梅の木に執着しすぎるあまり蛇になったのだ。

このように、蛇と執着が結びついた話は多い。ここで取り上げる道成寺の物語も女が蛇身へと変貌するが、そのきっかけは男性への執着であった。

かように執着や嫉妬などの象徴として蛇が扱われるようになるのは、説話が仏教的な観念をよく反映しているからである。神・悪神として登場し、畏れの対象であった蛇のイメージは、古代末期以降大きく塗り替えられていった。

【参考文献】

志村有弘、松本寧至『日本奇談逸話伝説大事典』勉誠社、1994年

近藤良樹「昔話・神話にみる蛇の役柄：知恵・生命・異性の象徴となる蛇」『HABITUS』(西日本応用倫理学会) 2012年3月、16巻、1頁-25頁 など



「道成寺縁起」 部分

(『続日本の絵巻24 桑実寺縁起 道成寺縁起』)
逃げる僧を追って、道成寺の境内に蛇が現れる

道成寺伝説 ～能・歌舞伎～



「道成寺縁起」より 蛇が鐘に巻き付く場面
小松茂美編『築美寺縁起・道成寺縁起』
中央公論社 1992 年

道成寺伝説（安珍 清姫伝説）

あらすじ

清姫は熊野詣に参りに来た僧の安珍に一目惚れし迫った。安珍は断り切れず、清姫に熊野からの帰り再び会うことを約束し去っていく。ところが約束の日安珍は来ず、清姫は安珍を探しに出た。清姫はついに安珍を見つけたが、安珍に人違いだと言われ、怒りで蛇の姿になってしまった。

蛇の姿になった清姫から逃げるため、安珍は道成寺の鐘の中に隠れた。しかし、清姫は鐘ごと安珍を焼き殺してしまうのだった。

能 「道成寺」

あらすじ・演出

道成寺の釣鐘が再興される日、能力(寺で力仕事をする下級の僧)は住僧より女人禁制が申し渡されていた。しかし、そこへ来た白拍子の女が能力に頼み込み舞を見せることを条件に寺内に入りこむ。女は乱拍子などを舞ううちに隙をうかがい鐘に近づくと、鐘は落下し女もその中に消えてしまった。このことを知らされた住僧は、白拍子の女は怨霊であろうと考え鐘に向かって祈りだすと、鐘が上がり中から鬼女が現れるのだった。

能の技巧の全てをつくした演出が施されており、能役者にとっては一人前になれるか見極める卒業試験の意味合いがある作品である。鐘の中に女が入り、消えてから鬼女の姿となり出てくる後半部分が一番の見どころ。



能「道成寺」後場
森田拾史郎著『能の四季』
京都書院 1997 年

歌舞伎 「京 鹿子娘道成寺」

あらすじ・演出

道成寺で鐘が再建された日。都の白拍子花子が舞を舞うことを条件に女人禁制の鐘供養の場に入り込む。格調高い白拍子の舞や娘の恋心をあでやかに踊るうち正体を現し、大蛇と化して鐘を占拠してしまう。

桜が満開の客席側、色彩の変化に意味を持たせた衣装やその引抜など、舞台面が華やかに演出されている。能に対し、正体を現し大蛇と化すまでの、白拍子の舞や娘の恋心を踊る前半部分が一番の見どころである。

【参考資料】西野春雄 他『能・狂言事典』平凡社、1999 年 など

※「猿」セクション担当：神戸女子大学文学部史学科4回生岡山智咲・戸田花音・西平結菜

蛇 19. 七太夫仕舞付「源太夫・鉢木・熊野・道成寺・通小町」巻



19. 七太夫仕舞付「道成寺」

刊 大本 1冊(全11冊)

万治元年(1658) 十二月 (京)林和泉

頭注や前付の形で、間^{あいきょうげん}狂言のセリフ、衣装付、囃子^{はやし}付など、能の演出に関わる情報を加えた謡本^{うたいぼん}としては珍しいものである。

本資料は、朱の書入れ（謡い方を示す節付の補筆・修正）の他、「道成寺」のワキ（道成寺の住僧役）のセリフに、貼紙による修正部分が多くみられる。
(伊藤正義文庫)

蛇 20. 長唄稽古本合綴「京鹿子娘道成寺」

刊 半表紙 1冊

(江戸) 沢村利兵衛

この本は16冊の長唄稽古本が合綴された1冊である。「京鹿子娘道成寺」は、能の道成寺を歌舞伎舞踊にしたもので、満開の桜の下で、桜模様の着物を着た女形が、女心の様々を踊りぬくという華麗さが見所である。曲も人気舞踊の大曲が使用されている。右は、「京鹿子娘道成寺」(志水文庫)の表紙である。

(志水文庫)

※参考文献 水落潔『歌舞伎鑑賞辞典』東京堂1993年



20. 京鹿子娘道成寺

【展示6参考】『古事記』の三輪山伝説（中巻・崇神天皇条より） ※ p.6・p.11参照

此謂意富多多泥古人、所以知神子者、上所云活玉依毘賣、其容姿端正。於是有神壯夫、其形姿威儀、於時無比、夜半之時、儼忽到來。故相感共婚共住之間、未經幾時、其美人妊身。爾父母恠其妊身之事、問其女曰「汝者自妊。无夫何由妊身乎。」答曰「有麗美壯夫、不知其姓名、每夕到來、共住之間、自然懷妊。」

是以前父母、欲知其人、誨其女曰「以赤土散床前、以問蘇此二字以音紡麻貫針、刺其衣襦。」故如教而旦時見者、所著針麻者、自戸之鉤穴控通而出、唯遺麻者三勾耳。爾即知自鉤穴出之狀而、從糸尋行者、至美和山而留神社、故知其神子。故因其麻之三勾遺而、名其地謂美和也。此意富多多泥古命者、神君・鴨君之祖。

〔現代語訳〕（日本古典文学全集『古事記』に拠る）

この意富^{おほたたねこ}多々泥古という人を、大物主大神の子と知った理由は、次のようである。先に述べた活玉^{いくたまよりびめ}依毘売は、その容姿が整って美しかった。そこに、一人の若者がいた。その容姿や身なりは、当時比類ないほど立派だった。その男が、夜中に、突然姫のもとへやってきた。そして互いに愛し合い、結ばれて男が姫のところへ通ううちに、まだいくらか時が経たないのに、その乙女は身ごもった。

そこで、乙女の両親は、そうして身ごもったことを不思議に思って、その娘に尋ねて、「お前はひとりでに身ごもっている。夫もないのに、どういうわけで身ごもったのか」と言った。娘は答えて、「美しい若者がいて、その姓名は分りませんが、夜毎にやってきて、ともに暮らすうちに、自然と身ごもったのです」と言った。そこで、その両親は、その男の素性を知ろうと思って、その娘に教えて、「赤土を床の前に撒き散らし、つむいだ麻糸を針に通して、それを男の着物の裾に刺しなさい」と言った。

そこで、娘は教えられたとおりにして、朝になって見ると、針につけた麻糸は、戸の鍵穴から抜け通って出て、残っている麻糸は、糸巻にただ三巻だけだった。それで、即座に、男が鍵穴から出ていったということを知って、糸を頼りにたどって行くと、三輪山に着いて、神の社のところで終っていた。それで、その神の子と知った。そして、その麻糸が糸巻に三巻残ったことから、その地を名付けて三輪山というのである〔この意富多々泥古命は、神君・鴨君の祖先である〕。

蛇のスーパーパワー

蛇のイメージは前述のように、神話と説話・伝説の場合とで少しずつ異なっている。神話における蛇は、全体として人間よりも地位が高く、神格化され、人間との異類婚も少なくない。第Ⅰ部異類婚姻譚の「蛇姫」の項で述べた^{おだまき}芋環型神話は、三輪神社の縁起として語られてきた。

一方で説話における蛇は、神話に見られる神性を失い、仏教の見地から執着深い畜生として否定的に捉えられる。『日本霊異記』『今昔物語集』などの説話集が仏教的な見地から執筆されていることも大きな要因だが、人間が強い情念や執着を持った時に蛇と化す例がしばしばある。そして彼らは仏教的な力で救われる。人間が蛇と化すのは何らかの悪業の結果とされるのである。

展示19・20で紹介した道成寺縁起伝承（安珍・清姫の物語）も、もともになる話は、男に執着した女と約束を違えた男とは共に仏縁で救われる結末になっている。この話を題材にした能「道成寺」では、大蛇と化した女が男を殺し、道成寺の僧に祈り伏せられるという結末となる。

『今昔物語集』には、人間に対してだけではなく、財物（巻13-44、巻十四-1）あるいは橘（巻十三-42）や桜（巻13-43）などの美しい花に執着するあまり蛇と化してしまった人間の話が登場する。怪異現象を取材し仏教的な解釈で因果応報から説明する『因果物語』（展示22）にも、蛇と化した人間の話を仏教的な見地から取材した話を載せる。

蛇は神性を有する存在であるという意識が残っているのが、蛇との婚姻から生まれた子どもの話だろう。Ⅰαの蛇姫「芋環型」の例であげたが、蛇との婚姻によって生まれた子が英雄的な人物となる伝承がいくつかある。ここでは、緒方三郎^{これよし}惟義の話載せる『平家物語』巻八（*展示23）を展示した。緒方は、尋常な人間ではなく蛇の子の子孫だから特別な力があるという。そこには、蛇ならば超越した、尋常ならざるパワーを持っていても不思議はないという意識があるだろう。

21. [福王雪岑 能狂言画卷]

紙本著色 卷子本 1軸



21. 福王雪岑能狂言画卷「道成寺」

江戸中期、福王雪岑筆。能と狂言の彩色絵18図が交互に描かれた絵巻。全6紙。末尾に「雪岑筆（印）」の落款。冒頭の「千歳」に始まり10曲の能絵と7曲の狂言絵を収める。能絵は五番立の曲順に基づいて描かれており、各絵図左上に曲名が墨書されている。最後に「呉服」を置くのは祝言能として扱ったためであろう。

所収曲：千歳・白楽天・鼻取すまふ（鼻取相撲）・俊成忠則・くさひら（茸）・松風・歌仙・道成寺 金春流・ゑさし十王（餌差十王）・富士太鼓・花子・羅生門・こんふうり（昆布売）・三輪・宗八・烏帽子折・絃上・呉服。

伊藤正義文庫

^{ふくおう} ^{せつしん}
*福王雪岑 元禄14年～天明5年（1701～1785）

江戸中期の能楽師・絵師。雪岑は、ワキ方福王流九世^{も え も ん も り か つ}茂右衛門盛勝の画号。絵を画師の^{はなぶさ}英^{いつちよう}一蝶に学び、能・狂言を題材とした絵をよく描いたほか、俳諧本の挿絵も手がけている。

22. 因果物語



22. 因果物語

刊 大本1冊（三巻合1冊）
寛文元年（1661）（京）丁子屋刊

仮名草子、三巻3冊（片仮名本）。鈴木正三^{しょうさん}作。本書はもともと平仮名三巻本で流布したが、正三門下の義雲・雲歩が編集を施して寛文元年（1661）に片仮名本を上梓したという。平仮名本は、再版時に三巻24話を増補して、現存の六巻6冊で寛文年間に刊行された（浅井了意編）。

本書は談義のために怪異譚を借りて仏法を唱導しようとした「説教」用の種本とみられている。片仮名本はそうした意向に添って、仏教の因果のことわりを正しく伝えようとする

姿勢が一貫している。平仮名本は唱導の目的に加えて、読者の興味に訴えるべく怪異・奇談を語ることと主眼がおかれており、その意味では文芸的意識がうかがえる。掲出箇所は、巻之上より「八 愛執深女忽ち蛇体ト成事 付夫婦蛇ノ事」。前掲の「道成寺」譚と同じように、愛執の深さゆえに蛇と化してしまう話。

志水文庫

23. 平家物語（巻八）

刊 大本1冊（全5冊）
天和2年（1682）刊

鎌倉前期の軍記物語。『徒然草』は作者として信濃前司行長の名をあげるが、作者成立年ともに未詳。治承～寿永期の内乱（1177～85）を素材に、平清盛を中心とする平家一門の興亡を主軸に、仏教的無常観を主題として叙事詩的に描く。琵琶法師によって語り継がれたほか、読み物として写本でも伝えられ、様々な異本（内容や巻数の異なるテキスト）が知られる。



22. 平家物語（巻八）

掲出箇所は「四 をたまきの事」。豊後国の武将緒方惟義（惟栄・惟能）は、大蛇（高知尾の明神）が里の女に通って生まれた子「大太」の五代の孫であることが語られる。挿絵は、女が男につけた糸をたどって大蛇の住む岩屋を訪れ、大蛇が女の求めに応じて姿を見せた場面。

志水文庫

24. 児雷也豪傑譚



24. 児雷也豪傑譚 第三十一編上巻より
「賊主 大蛇丸」

刊 小本 1冊（全43冊）
（江）甘泉堂和泉屋市兵衛

江戸時代後期の長編合巻。全四十三編172巻、未完。初編～十一編は美図垣笑顔（六編～十一編の実作は一筆庵主人（溪斎英和泉））、十二編～三十九編は柳下亭種員^{りゅうかていたねかず}、四十編～四十三編は柳水亭種清作。挿絵は歌川国貞・同 国輝・同 国盛・二世歌川国貞・歌川国芳・同 芳房・同 芳幾が担当し、天保10年（1839）～明治元年（1868）刊行。

主人公の児雷也・九州豪族の遺児尾形周馬は、越後妙香山の仙人から蝦蟇の妖術を授かり、お家再興のため各地の悪人を懲らしめるのが主たるストーリー。越中立山の蛞蝓仙人か

らなめくじの妙術を得た美女綱手を妻とし、悪賊の大蛇丸と、蝦蟇・蛇・なめくじの三すくみの妖術乱闘を繰り広げる。児雷也の強力なライバルである大蛇丸は、越後（現 新潟県）青柳の池に住む大蛇もくずと武士との間に生まれた子ゆえ特別な力を持っている。

志水文庫

『南総里見八犬伝』と八犬士たち

異類婚姻と犬

『八犬伝』は、約束から犬（八房）と人間の女（伏姫）が夫婦になり山に篳るという話だが、これは民話「犬婿入」の展開に類似している。「犬婿入」は異類婚姻の中でもムコ側が優位な珍しい話型で、例は他の話型に比べ多くはない。現在は兵庫県美方郡をはじめとした地方の民話として残されている。

八犬伝の始まり

結城合戦から逃げ延びた里見義実（さとみよしざね）は杉倉木曾介氏元（すぎくらきそのすけうじもと）と堀内蔵人貞行（ほりうちくらんどさだゆき）と共に安房（あわ）へ向かう。しかし安房・平群郡の滝田（たきだ）の城では、山下柵左衛門定包（やましたさくざえもんさだかね）が側女（かなまり）の玉梓（たまぎ）と共に贅（ぜい）を尽くしていた。そこで金碗孝吉（かねわんこうきち）の助けを借り、義実（さとみよしざね）は里人を集め定包（さだかね）を討つ。

数年ののち義実（さとみよしざね）は十五子（いさご）と結婚（こんこん）、伏姫（ふせひめ）・安房守義成（あわのかみよしなり）（二郎太郎）の親（おや）となった。ある時、安西景連（あんざいかげつら）が大軍（おほぐん）を率（もつ）いて滝田（たきだ）の城（しろ）に攻（こう）めてくる。里見（さとみ）の勢（せい）も奮（ふる）闘（とう）するが城（しろ）を取り囲（こも）まれた義実（さとみよしざね）たちは兵糧（へいりやう）も底（そこ）をつき最後（さいご）の決（けつ）心（しん）をかためねばならない時（とき）が来（き）た。思い余（おもひよ）って庭（にわ）に出（で）た義実（さとみよしざね）は飼（か）い犬（いぬ）の八房（やつふさ）に冗談（じやうたん）半（はん）分で「もし敵（てき）将（しやう）景連（かげん）の首（くび）をとってき（き）たなら（ら）ば伏姫（ふせひめ）を嫁（よめ）に（に）して（して）よい」とつぶやいたところ八房（やつふさ）は本（ほん）当（とう）に景連（かげん）の首（くび）を取（と）り、それ（それ）を契機（けいき）に義実（さとみよしざね）は逆転（ぎゃくてん）の勝（か）利（り）を収（おさ）める。この戦（いくさ）の第一（だいいち）の功（こう）は八房（やつふさ）である（である）ので約束（やくさく）通り（とおり）伏姫（ふせひめ）は八房（やつふさ）と夫婦（ふうふ）になる。

伏姫（ふせひめ）は八房（やつふさ）とともに富山（とみさん）の山奥（さんおく）の洞穴（どうけつ）で過（すご）して（して）いたが、ある時（とき）牛（うし）に乗（の）った草刈（くさき）童子（どうし）と出（で）会（あ）う。童子（どうし）が伏姫（ふせひめ）の懐妊（くわいにん）を告（つ）げ（て）たところ、犬（いぬ）の子（こ）を宿（しゆく）して（して）しま（し）った伏姫（ふせひめ）は悲（かな）しみに暮（く）れる。伏姫（ふせひめ）が遺書（いしよ）をしたため経（きやう）を讀（よ）んで（いて）いたところ、義実（さとみよしざね）の近習（だいしゆ）である大輔（だいすけ）が八房（やつふさ）を銃（じゆう）で撃（う）つがその流（り）れ弾（だん）が当（あた）り、亡（な）なってしまう。伏姫（ふせひめ）は仁義礼智（にぎれいち）忠（ちゆう）信（しん）孝（かう）悌（てい）の8（はち）つの珠（たま）が通（とほ）された数珠（ずしゆ）により一度（いちど）息（いき）を吹（ふ）き返（かへ）したが、己（おのれ）の純潔（じゆんけつ）を証明（しやうめい）するた（た）め腹（はら）を切（き）り自（じ）害（がい）した。腹（はら）の傷（きず）口（ぐち）から一（いち）朵（た）の白（しろ）氣（き）が出（で）、襟（えり）にかけ（か）けた水晶（すいしゆ）の数珠（ずしゆ）が切（き）れる。珠（たま）は光（ひかり）を放（はな）つて八方（はちほう）へ（へ）と散（ち）り失（し）せ（せ）た。この珠（たま）が八犬士（はつけんし）の証（しやう）となり物（もの）語（ご）が始（はじ）まる。

八犬士

「八犬伝忠勇揃」（林一美『秘板・八犬伝〈花の巻〉』縁園書房、1965年）



馬琴と馬琴文学の世界

伏姫と八房

伏姫は嘉吉2年（1442）の夏の末に生まれたが、まもなく三伏の候（五行における、旅などを避け家に伏せたほうがよい時期）であったので名を伏姫とつけられた。伏姫は幼いころから非常に美しかったが、三歳になってもものを言わずよく泣く子であった。加持祈禱も効果がなかったが、あわぐんすざきみょうじん いわや安房郡洲崎明神の窟へお礼参りに行ったところ、道中で老人から仁義礼智忠信孝悌と書かれた水晶の数珠を授けられる。

八房は母犬を狼に噛み殺され1匹の狸によって育てられた。やがて屈強な容貌へと成長し、立派な犬がいるとの噂を聞いた義実（おきくに）に気に入られ、里見家の犬となる。「八房」という名前は、首と尾に八つの斑点があることが由来である。

曲亭馬琴について

曲亭馬琴（1767-1848）は江戸時代後期の戯作者。さきち おきくに本姓は滝沢、字は瑣吉であり、本名は滝沢興邦。現代では「曲亭馬琴」の名で知れ渡っているが、これは戯号である。もとは侍であったが、寛政2年（1790）に、さんとうきょうでん浮世絵師兼戯作者の山東京伝との出会いにより戯作者となる。

戯作者となった同年、処女作である黄表紙つがいはだして『にぶきょうげん二分狂言』を著す。寛政8年（1796）には本格的な作家活動を開始し、黄表紙本や斬本の執筆を行う。文化元年（1804）の読本げっぴょうきえん『月永奇縁』で強い人気を博し、これを契機に読本の製作に傾倒するようになった。天保11年（1840）に過労のため盲目となるが、義娘とぎむらみちの土岐村路（琴童）を口述の代筆者とし、作品の執筆を続けた。

馬琴文学の特徴は、一貫した勧善懲悪の精神と、幼少期から愛読していた中国小説（稗史）のオマージュにある。着想全体が稗史から取り入れられており、八犬伝ではとりわけ『水滸伝』や『三国志』、『搜神記』などからよく引用されている。八犬伝そのものは南総里見氏興隆の事蹟と人間関係を下地としているが、作品中の時代考証、儒教思想、中国文学作品のオマージュがそこに融合し、緻密な作品に仕上がっている。

生涯における著名な作品としては『南総里見八犬伝』をはじめ、文化3年（1807）の『ちんせつゆみはりづき椿説弓張月』、文政8年（1825）『けいせいすいこでん傾城水滸伝』が挙げられる。多数の人気作による馬琴の収益は一家を賄えるほどであり、日本で初めての専業作家とみなしてよい。



「曲亭馬琴肖像」（林美一『秘板・八犬伝〈花の巻〉』縁園書房、1965年）

犬 25. 『南総里見八犬伝』

刊 半紙本 5冊（全106冊）

文化11年（1814）～天保13年（1842）

山崎平八（初～第5）・美濃屋甚三郎（第6、7）・丁子屋平兵衛（第8～終）刊

曲亭馬琴著



第壹輯巻一 表紙（左）・裏表紙（右）

馬琴の著作中でも、最も長編となる作品。絵は柳川重信、溪斎英泉、歌川国貞が担当し、全編9輯、106巻からなる。その人気から他の読本より高値で売られ、この作品から原稿料の概念が始まった。完結までの製作年数は28年にもおよぶ。9巻目は上・中・下以降もさらに続いており、表紙は同じ絵が色違いで刷られている。本来は9巻上・中・下で終わらせるつもりだったのかもしれない。

（志水文庫）



第九輯 巻一表紙



第拾篇巻七 表紙



第拾一篇巻十三・十四



第拾七輯巻四十一 表紙・裏表紙



第拾九輯巻五十 表紙・裏表紙

犬 26. 錦絵「富山の奥に伏姫神童に遇ふ図」

刊 大判錦絵（三枚続）

水野年方画



26. 「富山の奥に伏姫神童に遇ふ図」

富山で伏姫へ神童（草刈童子）が懐妊を伝える場面。右側に八房がいるのに対し、左側には大輔が迫ってきている。「伏姫」という名は、祟りによる因果から人でありながら犬に従い、悲惨な運命を遂げることを暗示しているのではないかと作中で仄めかされている。

（志水文庫）

犬の魔力と魅力

犬は古来、人間にとって最も身近な動物の代表であり、早くから家畜化されて猟や警備等の実用的な役割も果たしてきた。犬は人間の優れた従者として、忠犬伝説は数多く伝わっている。また、優れた嗅覚等の感覚や能力から、霊力や神通力のある霊的存在とされる側面もあった。藤原道長の犬が呪詛物から主人を守った話はとりわけ有名で、『宇治拾遺物語』巻第十四、『古事談』巻第六、『十訓抄』巻第七などに見える。

今回の展示で紹介した異類異形のものたちの中では、犬はいささか地味な印象がある。実際に狐・蛇・猿と比べると、犬は親しみやすく、不思議なところの少ない動物ではなかろうか。

犬が主役となる文学や芸能の作品は決して多くはない。『南総里見八犬伝』が群を抜いて有名なので、今回は詳細に紹介をした。芸能作品からは、近松門左衛門作の浄瑠璃「相模入道千疋犬」を紹介しよう。近松が、『太平記』を下敷きに江戸幕府の政治批判をした作品で、不思議な力を持つ賢い犬が活躍するストーリーである。

もう一点、動物の犬ではないが、「^{こまいぬ}狛犬」の画を紹介しよう。狛犬は、高麗から伝来したので高麗犬、または魔除けとして置かれたので拒魔犬とも呼ばれたという。いま私たちが「狛犬」と呼ぶのは、玉座や神社の社殿前に向かい合わせに置かれた2頭の像——口を開けた「阿」の形の像と口を結んだ「吽」の形の像——である。これは、仏像の前に一組の獅子（ライオン）の像を置いたことが始まりとされており、本来は獅子二頭であった。しかし、日本に伝来後、平安時代初期に獅子と狛犬の組み合わせになったとされている。いま私たちが「狛犬」と呼んでいるのは、厳密に言うなら獅子と狛犬一頭ずつの組み合わせで、「狛犬」は角がある、ユニコーンのような姿なのである。

27. 相模入道千疋犬

さがみにゆうどうせんびきいぬ

刊 半紙本1冊

(坂) 山本九右衛門・(京) 山本九兵衛刊



27. 相模入道千疋犬

五段、浄瑠璃、近松門左衛門作。正徳4年(1714)7月または8月、大坂竹本座初演。近松の太平記もので、北条高時の専横から北条氏滅亡までの時期を扱っている。七行本、90丁。

「相模入道」とは鎌倉幕府第十四代執権北条高時のこと(※展示2「太平記」参照)。「生類憐みの令」を発して犬を過剰に愛護した江戸幕府の五代将軍・徳川綱吉をこの相模入道に見立て、「正徳の治」を行った新井白石を名犬・白石に見立てている。

闘犬好きの相模入道は、人々にも犬を敬わせているという設定で、北条方と天皇方との抗争に、新井白石の名をとった犬を活躍させるなどの一連の趣向により、「生類憐れみの令」への風刺を重ねて当代性を与えている。

志水文庫

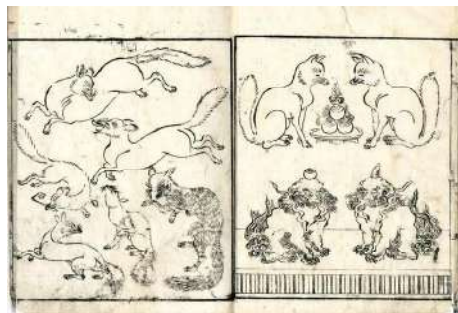
28. 諸職画鏡

しよしよくえかがみ

刊 大本1冊

寛政6年(1794) (江) 須原屋市兵衛ほか刊

北尾政美(鋤形蕙斎)画、申椒堂主人編。大工や諸職人におけた墨摺図案・絵手本集。巻頭凡例に「今此画本は絵の入用の諸職人のため 或は画こゝろある人を早く画道に入しめんが為に…(中略)…此一巻を見てこひ求め 則諸職画鏡と題し」刊行したものという。序の部分以外はすべて画で、「倡妓」「酒呑」



28. 諸職画鏡

といった当世風俗から、仁王・飛天など仏教関係の像、諸神や仙人、有名な武人、大津絵の図像、各種の動物から鶴や牡丹などの花鳥まで、多様な和漢の画題を精緻に描く。

掲出個所は、稲荷を守る狐の像と狛犬、左は狐。本来は口を開けた「阿」形（向かって右、獅子）は角なし、口を結んだ「吽」形のほう（狛犬）には角があるべきところ、ここでは逆になっている。本書の影響か、現在でも獅子と狛犬が逆のものがしばしば見られる。

志水文庫

※北尾政美（1764～1824）は、江戸中期から後期の浮世絵師。北尾重政（初代）に浮世絵を学び黄表紙のほか、武者絵・浮世絵・花鳥画を多く執筆。後年、津山侯お抱え絵師となり、狩野派を学んで肉筆画、略画絵本に専念した。代表作「近世職人尽絵詞」。

人間味あふれる鬼たち

「鬼」とは、古来、死者の魂、悪しきもの、人間を殺したり呪うものなどをさして言った。異能の持ち主が鬼と呼ばれることもあり、また、蛇に似た属性になるが、人間が他人を呪って鬼と化す場合もあった。

こうした恐ろしいイメージが強くある一方で、近世に近づくと人間味あふれる鬼や妖怪たちが登場してくる。『酒吞童子』（展示32）の鬼も、酔い潰れて退治されたのであった。

ここでは、ちょっと茶化された、愛すべき鬼たちの姿を紹介しよう。右の展示29は、大津絵の題材となっている「鬼の寒念仏」を描いた呉春の絵に蕪村が句を添えたもの。「いましめのほのにほひけり寒念仏」

鬼が寒念仏の行をしている様子である。寒念仏（冬の季語）とは寒中三十日間、夜の戸外で鉦を叩き、声高く念仏を唱える修行で僧俗は問わないのだが…、さて。

展示30・31は狂言に登場する鬼である。先に「鬼継子」（展示11）をあげたが、狂言「節分」の鬼も同じく、人間の女性に惚れて逆にやられてしまう。節分の夜に訪れた鬼が女に一目惚れし、小歌をうたって口説く。女は鬼をだまして隠れ蓑・隠れ笠・打ち出の小槌を取り上げたあげく、豆をまいて追い払うというもの。節分の豆まきの風習が、室町時代にすでにあったこともうかがえる。

29. 蕪村句呉春画「鬼の寒念仏」

写 掛物・軸
紙本彩筆

与謝蕪村句、呉春画。右に墨染めの衣を着て鐘を首から掛けた鬼の図（大津絵の画題「鬼の念仏」によるもの）が描かれ、「呉春」の印が押されている。呉春（松村月溪、1752～1811）江戸後期の画家。南画と円山派とを総合した独自の画風を確立して四条派の祖となった。与謝蕪村（1716～1783）の門弟で、門下では早くから高い評価を受けていた。



29. 蕪村句呉春画「鬼の寒念仏」

絵の左には「いましめのほのにほひけり寒念仏」と発句（俳句）が書かれ、「東成」の印がある。「東成」は蕪村が晩年使用した号の一つ。弟子の呉春が描いた絵に、蕪村が賛をつけたものだろう。蕪村の句は、『蕪村全集』巻一によれば、「遺草」であり制作年は未詳とされている。

志水文庫

大津絵の画題「鬼の念仏」

大津絵とは、江戸時代、近江国（滋賀県）大津の追分、三井寺周辺で売られていた素朴な民芸的絵画をいう。東海道の旅人の手軽な土産物として、寓意を込めたユーモラスな主題と速筆軽妙な略描が親しまれた。その始源は寛永年間（1624～44）とされ、当初は十三仏や来迎仏などの仏画が描かれた。のちには「藤娘」「鬼の念仏」「瓢箪鯰」「鷹匠」「奴」など戯画的、風俗的な主題の版画が中心となった。

大津絵の鬼は、人間の営みを風刺的に演じた姿で10種ほどの画題に描かれている。よく見られる「鬼の念仏」は、勧進僧に扮した鬼が墨染めの僧衣を身につけ、寄進者を記す奉加帳を左手に持っている。さらに胸にかけた鉦を打つための撞木を右手に持ち、唐傘を背負う。顔も特徴的で、巨大な2本の牙に飛び出した目、逆立った髪、猫のような髭、そして二本の角を持つ。折れた片方の角は我を折って改心したことを示し、形だけの善行を積む偽善の風刺とされた。この絵は「大津絵十種」の一つとして、大津絵の店の看板に描かれるほど大津絵を代表する画題となる。また、子供の夜泣き止めの護符ともされた。



大津絵の「鬼の念仏」
（『諸職画鏡』より）

30. 能画図式

刊 半紙本1冊

明治20年（1887）東京 吉田金兵衛刊



能画図式

河鍋暁斎筆の狂言画の絵本。『能画図式』の初版は慶応3年（1867）で、暁斎が自らの絵を刊行した旨の序文をもつ二巻2冊本であった。乾冊の最初には、能画（「面箱」「千歳」「翁」「三番叟」「高砂」「田村」「羽衣」）も描かれていた。明治20年に再刊された本書は、慶応3年刊本のうち、乾冊の末尾8曲と坤冊の全64曲を合わせた計72曲の狂言画が収められている。本書は、慶応3年刊本とは曲の掲載順が一部入れ替わり彩色も異なるが、再刊の経緯については未詳。狂言の一場面を、写實的でありながらユーモラスな筆致で描き、現在の漫画のようにセリフの一部も記されている。掲出箇所は左下「節分」。（右は「花子」・「素袍落し」、左上「二千石」）

伊藤正義文庫

31. 絵入 続狂言記（巻五）

刊 横小本1冊（全五巻5冊）

嘉永元年（1848）大坂 鷲頭辰三郎ほか刊



絵入続狂言記（巻五）「節分」冒頭

『狂言記』は、江戸時代に版本として市販された狂言台本。最初の『狂言記』（正篇）は万治3年（1660）刊で、続いて『狂言記外五十番』『続狂言記』『狂言記拾遺』と各50曲、計200番が公刊された。（＊詳細は展示11参照）巻五は「牛馬・入間川・路蓮坊主・箕潜・蟹山伏・素袴落・磁石・三人片輪・算勘賀・節分」の10曲所収。

掲出箇所は「節分」。あらすじは以下の通り。節分の夜に蓬莱の島の鬼が日本に渡り、立ち寄った家の女房に一目惚れする。鬼は流行の小歌を謡って言い寄るが、女は簀・笠・打出の小槌という宝物をだまし取ったうえに、「鬼は外」と豆を打って囃し、鬼は逃げて行く。

伊藤正義文庫

酒呑童子とその物語

大江山系統の伝説

酒呑童子の住処を丹波の大江山から近江の伊吹山に移した伊吹山酒呑童子退治の物語も存在するが、ここでは大江山系統を取り扱う。

御伽草子より

源頼光は、姫たちを攫^{さら}った酒呑童子の討伐の勅命を受け、5人の仲間と共に山伏姿に変装して鬼の本拠地である大江山に出発する。その道中、三社の神である老人に出会い、戦いの助けとなる毒酒と兜をもらう。対面した酒呑童子は頼光らを試したが、これを乗り切り、鬼たちに毒酒を飲ませることに成功する。囚われた姫たちに鬼の寝所を聞き行ってみると、そこには背丈約6メートルで、髪は赤く逆立ち、髪の間から角が生えて髭も眉毛もぼうぼうに茂り、足や手は熊のようになって寝ている酒呑童子の姿があった。そこへ先の老人が現れて鬼たちの動きを封じ、頼光らは鬼を退治することができた。姫たちを助け出し都に戻ると、万民は彼らを賞賛した。

南北朝～室町初期の「大江山酒呑童子」が最も古いとされ、他には室町期の御伽草子や絵巻などさまざまな伝本がある。謡曲、浄瑠璃にも取り込まれ、江戸時代には「大江山物語」など黄表紙本も作られた。



酒呑童子絵/部分 東洋大学図書館所蔵（大島建彦『御伽草子集 日本古典文学全集36』小学館、1974年）

異伝として、酒呑童子は元々越後の国に生まれた人間で、越後国和納村^{わのう りょうごんじ}の楞厳寺に入ったが勤まらず、寺を出てついに鬼になったという伝説がある。また、元は類まれな美童で、深く仏門に帰依して修行を積んでいたが、自分に言い寄り思いを遂げられず自殺した女が現れて以降、仏門を捨てて墮獄の鬼になったという伝説もある。

一鬼のイメージ

日本の鬼は、邪悪な属性を備え、恐怖の対象となる悪神・悪霊のイメージを基本としながらも、力ある守護霊や善神の性格を兼ね備えた幅広い特徴をもっている。

現在民間行事として残っている節分に代表される追儼^{ついな}系の鬼は、強い力が制圧され、追放または帰順させられている。天下泰平・国土安泰という安らぎをもたらす一番古いとされる民俗信仰の形態であり、庶民の日常に深く結びついた鬼だといえる。

〈参考文献〉

志村有弘、諏訪春雄編著『日本説話伝説大辞典』勉誠出版、2000年
佐々木宏幹、宮田登、山折哲雄監修ほか『日本民俗宗教辞典』東京堂出版、1998年
乾克己、小池雅胤、志村有弘、高橋貴、鳥越文蔵編『日本伝奇伝説大辞典』角川書店、1986年

兵庫の鬼追い行事

喜多文庫より

喜多文庫とは、日本各地にて民俗芸能の詳細なフィールドワークを行った民俗芸能研究家、喜多慶治氏による、膨大な写真と調査記録からなる民俗学関係資料群である。

昭和40年1月18日 書写山円教寺 追儺法会 鬼追い 天台宗

円教寺の修正会の一行為として行われる。午後1時頃、摩尼殿の1堂で仕度をした鬼は、世話人に導かれて、奥山の白山神社に登る。

赤鬼。背中に槌をつちをかつぎ、右手に鈴、左手に松明

青鬼。両手で鉾をほこをかまえる。〈以下省略〉

「調査ノート」より引用

※調査ノート

喜多慶治氏が調査結果などを記した27冊のノートの抜粋。



白山権現社の前殿で、赤鬼（写真左）は鈴と松明を持ち、後に続く青鬼（写真上）は鉾を持って踊る。踊り終えた鬼たちは摩尼殿へ移動し、もう一度鬼の踊りが始まる。



参詣者は、行事の終わりに健康を願って鬼の面を被せてもらう。

昭和49年2月3日

三木市口吉川町 蓮花寺 鬼追

赤、黒、各1人、青鬼2人。ハゼの木の松明をふりかざして踊る。1回終るごとに松明を高い天井に向けて投げる。鬼4人。始め本堂内須味壇の裏手で支度をして1周打揃って境内の弁天社に参詣。その前で1踊りする。次いで本堂外陣で踊る。昔は鬼役の家が定っていたらしい。

「調査ノート」より引用

昭和39年2月11日 神戸市垂水区押部谷町 近江寺 鬼追い

細田（サイタ）西盛・福住・押部・栄・木幡・木見（コーミ）・木津・下細田・上細田の9集落があり、この順番で、毎年交替で当番になった集落が鬼追いをやっている。当番集落の希望者の子供たちを引き連れ、本堂の周囲を3回歩く。小鬼は、棒色の手拭を頬冠りにして、頭の所にある手拭に棕櫚の毛を少し付けている。また、棒色の法被・紺のたっつけ・草鞋ばき・ハゼの木の杖2本を持つ。1本は長さ1メートル、他50センチ程。紅白の紙で緩く巻いて、短い方は先に紅白の房をつける。子鬼は、鬼の出の合間の本堂に2列に並び、2人ずつ向き合い杖を打つなどして踊る。長い杖と短い杖を交互に使用する。親鬼は2人で赤・青の面を被る。

踊りの曲目

- 1 無の踊り
- 2 平の踊り
- 3 平の踊り 2・3と同じものを2回繰り返す
- 4 火合せ 松明を2人の鬼が打ち合う
- 5 火供え 松明を本尊に捧げる
- 6 餅切 欄間につけた餅を鉞で割る
- 7 花の踊り 桜の造花をかざして踊る

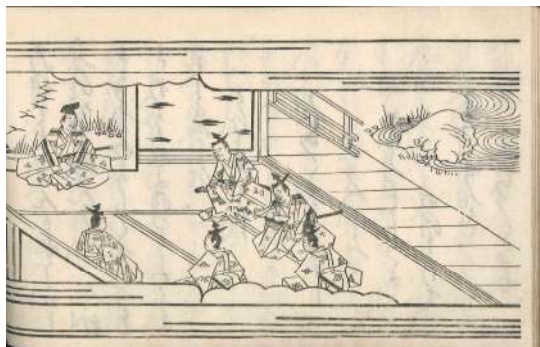
「調査ノート」を参考



親鬼の踊りの様子（写真上）と、その中でも花の踊りの様子（写真下）と思われる。

鬼 32. しゅてんどうじ

刊 横本 2冊



しゅてんどうじ 上巻



しゅてんどうじ 下巻

寛文年間（1661～1673年）頃に出版された、酒吞童子説話について綴られている作者不明の御伽草子である。全2巻2冊。大江山に住み人を喰らう酒吞童子をはじめとする鬼たちを、帝の命をうけた源頼光らが討伐しに行く怪物退治譚である。

展示されている上巻の場面は、勅命をうけた頼光が渡辺綱や坂田金時などの家来たちと詮議をしているところである。下巻の場面は、頼光が斬り落とした酒吞童子の首が、まだ動いて襲い掛かってきているところである。

（志水文庫）

※「鬼」セクション担当：神戸女子大学文学部史学科4回生堀 姫奈・松本睦未・三谷侑子

天狗の謎

天狗と「鼻」について

〈天狗の概念〉

天狗とは、山中に住むとされる想像上の怪物である。2種類おり、その1つは、私たちが想像する姿の「大天狗」、もう1つは、鳥のような顔立ちの「小天狗(烏天狗)」である。

中国の史書に登場した最初の天狗は、星の一種であった。地上に災害をもたらす流星と言われ、日本でもはじめは、中国の天狗像で歴史の舞台に登場した。

しかし、日本ではこの像が一般化されず、山中で起こる怪異現象が天狗の仕業であると考えられた。例えば、山中で物音や地響きがしたので、行ってみても何も起こっていなかったなど正体不明の現象に天狗の概念が用いられ、「天狗倒し」や「天狗笑い」などの名前がつけられた。これらの現象は人々に脅威を与えるが、実際に害はほとんどない。

平安時代になると天狗は山の霊力の象徴であり、山岳修行者の間で信仰されるようになった。そして、天狗は霊的・妖怪的存在と考えられるようになった。こんにちの天狗像は、顔が赤く鼻高く、団扇を持っており、姿は山伏に似ている。また、翼があるため空を自在に飛ぶことができる。この姿は、南北朝～室町時代の説話集『吉野拾遺』に鼻高の天狗に関する歌があることから、南北朝時代に形成されたと考えられる。



(左)大天狗 (右)小天狗(烏天狗)



伎楽面 治道

出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム (ColBase (nich.go.jp))



平田篤胤賛猿田彦御神像
『猿田彦神社誌』猿田彦神社
御造営奉賛会、1998

〈特徴的な「鼻」〉

天狗の一番の特徴は、長い「鼻」である。常に威張り、偉そうに振る舞う印象が天狗にはある。これは「天狗」の語が転じて、仏道修行で悟ってもいないのに悟りを得たと思ひ上る増上慢に陥った僧のことを指すようになったからともいう。その外見や内面の特徴は「鼻高々」という言葉の由来になった。天狗の象徴である鼻が高いと考えられる説は、2つある。1つ目は、中国から伝えられた仮面劇で使用する「伎楽面」の影響と見る説である。仮面は、鼻高の西域胡人(中国北方または西方の異民族)の顔貌をしたものが多い。2つ目は、日本神話に登場する猿田彦の影響と見る説である。猿田彦は、天照大神の孫が地に降り立つ際に先導役を担った神で、「鼻の長さは七咫^{あた}」と記載されている。

※咫は、手の平を広げた長さ

〈参考資料〉

志村有弘・松本寧至編『日本奇談逸話伝説大辞典』勉誠社、1994
杉原たく哉著『天狗はどこから来たか』大修館書店、2007
志村有弘・諏訪春雄編『日本説話伝説大事典』勉誠出版、2000

神秘の地 鞍馬

鞍馬と天狗

鞍馬は京都府京都市左京区にあり、東に鞍馬川、西に貴船川が流れる自然豊かな場所である。『更科日記』や『枕草子』などにも登場し、歌枕として平安時代以来の勅撰集・私家集にも詠歌が多い。鞍馬には平治の乱で敗れた源義朝の子・義経が入山し、大天狗から兵法を伝授されたという伝説がある。

義経と天狗についての物語は数多く存在している。下記の表は天狗との関わりの内容の一部である。

『義経記』	夜に「人住み荒らし偏へに天狗の住み家となりて、夕日西に傾けば物の怪おめき叫ぶ」僧正ヶ谷で武芸を稽古
『源平盛衰記』	「弓 ^{きゅう} ・箭 ^{せん} ・太刀 ^ひ ・刀 ^{えつ} ・飛越 ^ひ ・力業 ^{えつ} などをして谷峰を走り」
『平治物語』（京師本）	「天狗・化物の栖家へ夜な夜な行きて兵法を習う」
謡曲「鞍馬天狗」	「この山に年経たる大天狗」から兵法の伝授を受ける
舞曲「未来記」	「愛宕 ^{あたご} の山の大天狗太郎坊」をして義経の未来を語らしめ、天狗の法を授かる

「愛宕・高雄の天狗共」「鞍馬天狗僧正坊」「大天狗太郎坊」と具体的な名前がつけられ僧正ヶ谷は天狗の住む地となり、牛若に兵法を伝授するなど鞍馬天狗説話は時代が下降するに従い次第に発展していった。



鞍馬駅を降りたすぐにある大天狗像



鞍馬寺の仁王門



天狗をイメージしたアイス

（撮影：雍州路）

<参考文献> 乾克己ほか編『日本伝奇伝説大事典』角川書店、1986年

※「天狗」セクション担当：神戸女子大学文学部史学科4回生山本真由美・湯浅夏妃・和田万由子

天狗 33. 『謡訓蒙図会』 巻五「加茂・鞍馬天狗」・松風・西行桜・長良

刊 半紙本1冊
大坂 河内屋太助ほか刊



33. 謡金蒙図会（巻五）「鞍馬天狗」

『謡訓蒙図会』は、『謡曲画誌』を改題した本で、内容は同一である。『謡曲画誌』は、中村三近子と橘有税によって作成され、享保20年(1735)に刊行された。

この本は能の作品50曲にちなむ話をのせており、10巻10冊の絵と文で構成されている。その中の「鞍馬天狗」は、源義朝の子・義経が天狗に剣術の教えを受ける話である。義経は、父亡き後、幼少期に平清盛によって鞍馬寺の東光坊阿闍梨円忍に預けられた。義経が成長するにつれ、父の

仇をとりたかったが武術に長けていないため、鞍馬山の多聞天に祈り、誓いを立てに行くと、大天狗僧正坊に出会う。その後、義経は大天狗僧正坊に剣術の教えを受けることになったのである。

伊藤正義文庫

天狗 34. 『烹雑の記』

刊 半紙本 3巻2冊
文化8年(1811) 大坂 河内屋喜兵衛ほか刊

『烹雑の記』は、滝沢解（曲亭馬琴）著、柳 々居辰斎、勝川春 亭、滝沢琴嶺ら画。外題に「前集」とあり、後集・続集を予定していたが未刊である。上巻には9種、下巻に10種の考証随筆を収め、下巻に天狗の考証「天 狗」が収められている。（志水文庫）



34. 烹雑の記 「天狗」挿絵

狂言に登場する猿たち

狂言「鞆 猿」～無邪気な子猿 VS ワガママ大名～

35. 狂言図絵巻

嘉永元年(1848)

写 卷子本1軸 紙本彩色

鈴木南嶺画。1紙目に「嘉永元年五月上旬／南嶺先生之画／狂言之図／越塚南口蔵／（方形陰刻朱印「南口」）／元本□□□所蔵」と識語がある。嘉永元年(1848)の年記は、越塚なる人物が本書を入手した年だろう。

全16図のうち狂言絵は13図。「伯母ケ酒」図は伯母が男になっており、「伯母ケ酒」をもとにした戯絵か。最後3図は舞楽の「還城楽」と、女絵師と男絵師を



35. 狂言図絵巻より「鞆猿」

描いたもの。「悪太郎」は髪・髭を剃らないことから和泉流以外の演出に基づくらしいが、「隠 狸」は江戸中期以降、和泉流だけが所演曲としていたことから、特定の流派に基づく狂言絵ではないと考えられる。

所収曲は「三番叟・翁・末広がり・千鳥・福の神・神鳴・靱 猿・首引・悪太郎・隠 狸・伯母ケ酒・釣 狐・水掛 鯉」狂言絵には、彩色の指示を書いた注記も散見される。掲出箇所は「靱 猿」。

36. 狂言六義 巻五

写 大本1冊（全二十巻20冊、4冊欠）

和泉流の狂言二百番の台本で、各曲の型付けや演出注記も添えられた伝書。巻十六～十九欠。本資料は、古典文庫で複製刊行された『和泉流狂言集』（第一冊～第廿冊）の原本である斑山文庫旧蔵本の巻廿の奥書によると、同全20巻と同じ時に併せて書写されたものであると考えられる。

（※斑山文庫…国文学・歌謡研究者の高野辰之氏の蔵書。）

巻五は「萩大名・文相撲・鼻取相撲・蚊角力・鬼瓦・靱 猿・雁 大名・墨塗・二千石・文蔵」所収。

掲出箇所は「靱 猿」。弓矢を携えた大名が猿引に出会い、靱の皮に張るので猿の皮を貸せと脅すが、猿引の愁嘆を見て命を助け、猿とともに浮かれ舞うという内容。猿の着ぐるみを着て猿を演じるのは幼い子で、狂言師にとって初の舞台出演となることの多い作品でもある。



36. 狂言六義（巻五） 「靱猿」冒頭

狂言「猿婿」～猿ファミリーの大祝宴～

37. 狂言画

刊 半紙本（折帖仕立）1冊

大正8年（1919）名古屋 川瀬書店刊



37. 狂言画より「猿婿」

冒頭に楽屋の絵が3図と、鏡之間の絵が1図が収められ、以下、「三 本 柱」「柿山伏」「伯母ケ酒」「寝音曲」「二人大名」「麻生」「宗八」「二人袴」「瓢の神」「塗附」「不聞座頭」「猿 鯉」「田植」「釣 狐」「居杭」「二九十八」「菌」「悪太郎」「六地藏」「首引」「米市」と続く。掲出箇所は「猿 鯉」。

伊藤正義文庫

38. 狂言六義 巻二十

写 大本1冊（全二十巻20冊、4冊欠）

『狂言六義』については展示36を参照。巻二十は「柑子 俵・膏薬練・酢 薑・謀 生 種・芥 川・大藤内・財宝・瓢の神・唐人相撲・猿 鯉」所収。



38. 狂言六義（巻二十）「猿婿」

掲出箇所は「猿聲」。この曲に関しては、詞章だけでなく、演出注記など詳細な「付タリ」が何箇所にもわたり付されている。

本曲は、吉野の猿が姫猿・供猿を連れて嵐山の舅猿方へ参入をし、めでたく盃事をして謡い舞うというもの。能「嵐山」の替間として演じられる。参入り物の定型通りに運び、「太郎冠者あるか」「ハア～」などの定型的なセリフはすべて「キャッキャッ」と鳴き声で表す。猿はみな猿皮を着けて、その上に常の装束を着け、猿面を着ける。

伊藤正義文庫

兵法を伝授する天狗

天狗伝承の中では前述のように京都の鞍馬天狗が最も有名だろう。鞍馬という地を介して、天狗は源義経伝説とつながっている。幼少時に鞍馬寺に預けられた義経は、鞍馬天狗から兵法を習ったといえられている。

源義経（^{しやなおう}遮那王、牛若丸）の兵法修得に関する伝承は2種伝わっている。

- ①「僧正谷説話」は、鞍馬山の奥、^{そうじやうがだに}僧正谷で義経が天狗から兵法を習うというもの（※『本朝神社考』巻六「僧正谷」など）。
- ②「鬼一法眼説話」は、京都一条堀河に住む陰陽師・^{きいちほうげん}鬼一法眼が秘蔵する兵法書を義経が盗み出し、兵法を学ぶ話である。

①の代表例『平治物語』巻下「牛若奥州下りの事」では、天狗などの住处である僧正谷に義経が夜な夜な通ったと伝えるが、諸本で詳細は違う。古態本では、僧正谷に夜ごと通い兵法を修得したとのみ記す。だが、室町末～戦国時代成立の^{るふぼん}流布本では、「僧正谷にて、天狗と夜な夜な兵法を習ふ」とする。「天狗が義経に兵法を伝授した」という伝承は、他書の状況からも、鎌倉時代後期から南北朝時代の間に生まれたらしいと推測される。

②「鬼一法眼説話」は、『義経記』巻二「義経鬼一法眼が所へ御出の事」で、奥州から帰京した義経は、鬼一法眼が所持する中国伝来の兵法書「^{りくとう}六韜三略」を見たいと訪れるが、拒否される。そこで、義経は法眼の娘・幸寿に頼んで書を盗み出してもらい、兵法を会得することができたという。

この二つの説話は本来それぞれ独立した話だったが、義経譚の広がりにつれて統合する動きが生じる。それが、室町時代から江戸時代にかけて隆盛した幸若舞「未来記」や御伽草子『天狗の内裏』である。ともに義経の活躍を題材とする「判官物」作品で、僧正谷で兵法の修業をする義経に、大天狗が義経の未来を語る（※『天狗の内裏』では父）という内容である。

牛若の様子を見た天狗たちは、最終的に「天狗の法」を伝授すると決める。「未来記」では、義経が鬼一法眼から兵法書を盗み出すくどりが削除されたため、義経は「天狗の法」と鬼一法眼の兵法と2種の兵法を修得することになっている。それが、古写本『天狗の内裏』では、中国伝来の兵法書と「天狗の法」が統合された「四十二巻の天狗の兵法」なる書に変わる。

さらに、これらがもとになって、能「鞍馬天狗」が成立することになった。

39. 天狗の内裏

写 半紙本 1冊



39. 天狗の内裏

二巻、御伽草子。室町時代末期には成立。源義経の鞍馬山中修行伝説をメインの素材とする判官物。義経一代のダイジェスト、義経伝説の集成ともいえるべきものといえるもので、内容は以下の通り。判官源義経は、七歳の時に鞍馬寺に上り学んでいた。15歳の時、この山の中にある天狗の内裏を訪ねる。大天狗に案内されて五天狗の術を見たりし、大日如来となっている父義朝に面会して平家を討つことを誓う。義朝は喜び、判官の未来（弁慶や浄瑠璃姫との出会い）のこと、鬼一法眼の兵法書のこと等を語る。

本書の伝本は、刊本の系統とより古い写本系統がある。写本系統には本資料を含めて説経にみられるような古い俗調がみられる。本資料は片面9行、江戸中期頃の写して11段構成。本文の表記に訛りが見られることから、地方で語り物として行われていたものかとされている。筋は他の諸本とあまり変わらないが、描写が細かく叙述が長いのが特徴。

志水文庫

40. 〔牛若鞍馬天狗図 粉本〕

写 一枚物 1枚

鞍馬天狗の右腕の上に立つ牛若丸の図。描かれた天狗の姿は、現在の私たちが一般的にイメージするタイプの天狗とは少し異なる（展示39『烹雑の記』の図参照）。天狗の肌などには薄く彩色されており、牛若と天狗の着物には色の指定が書き込まれている。



40. 牛若鞍馬天狗図 粉本

※「粉本」…東洋画で下書・下絵のことを言う語。（古く、^{こふん}胡粉を用いて下絵を描き、そのあと墨を施したことによる。）
そこから派生して、後日の研究や制作の参考とするために模写した絵画のこととも言うようになった。

志水文庫

「人・動物・鬼・天狗 ～異類と異形～」展示図録

会場 神戸女子大学古典芸能研究センター展示室
期間 2024年10月1日（火）～11月29日（金）

編集 神戸女子大学古典芸能研究センター
（担当：非常勤研究員 大山範子）

〒650-0004 神戸市中央区中山手通2丁目23-1
神戸女子大学教育センター2階

こんにちは、神戸女子大学史学科です！

神戸女子大学の史学科とは？

史学科は、神戸女子大学文学部を構成する5学科のうちの1つです。須磨駅からバスで15分、離宮公園の裏手に建つ須磨キャンパスで学んでいます。

日本古代史・日本中世史・日本近世史・日本近現代史と東洋史・西洋史、そして日本考古学・日本民俗学という8つのゼミがあり、それぞれが関心のある分野に所属して、自らのテーマを日々追究しています。

ときには、史跡の見学や古文書調査にも出かけます。歴史が動いた現場に立ち、先人たちがつづったナマの史料を自分の眼と手で確かめる。教室での講義に加え、こうしたフィールドワークを重ねることで歴史の世界を体感し、かつ、多角的に「できごと」をみる力もいつしか身についてしまう。これが、私たちが学ぶ史学科の一番の魅力でしょうか。

そんな史学科に多いのは、やはり「歴史好き」。楽しくマニアックに研究を進めています。



博物館学芸員養成課程とは？

博物館学芸員とは、博物館におかれる専門的職員のことです。博物館法という法律で定められ、収集、保管、展示や調査研究、そして教育・普及活動を担当します。

学芸員になるためには、法律で定められた科目を修得して、学芸員資格を取得しなければなりません。神戸女子大学はそれらが開講されている大学の1つで、私たちは4年間をかけて以下の科目を学びます。



今回、展示の一部を担当したのが、博物館実習を履修中の4回生です。古典芸能研究センターのご配慮をたまわり、展示に挑戦させていただきました。

「異類と異形」展ができるまで

1 古典芸能センターを見学、展示室・展示品について学ぶ

古典研究芸能センターを訪問し、長田あかね先生・山崎敦子さんから展示室と収蔵資料について、大山範子先生から今回の展示品について教えていただく。展示するスペースのサイズを確認し、展示のイメージをふくらませた。

また、『ツレが「ひと」ではなかった』の著者で、史学科日本民俗学ゼミの川森博司教授からは、異類・異形の理解に欠かせない基礎知識を学ぶ。



2 展示説明を考える、作成する

展示品を説明するパネルとキャプションを、各班で分担して作成した。



3 展示する、そして開催

間隔やバランスを考えながら、展示品やパネル・キャプションを並べていく。初めての展示は、このようにしてできあがりしました。多くの皆さまに楽しんでいただければ幸いです。

